

英語英米文学論集

第33号 2024

安田女子大学英語英米文学会

英 語 英 米 文 学 論 集

Journal of English Language and Literature

安田女子大学英語英米文学会

English Language and Literature Society,

Yasuda Women's University

目 次

認知意味論の観点から

ドイツ「哲学的人間学」の伝統を再考する …………… 青 木 克 仁 1

「虚構世界」と「現実世界」：小説を読む行為と

異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (17)

——『手袋を買いに』の母狐の言葉

の持つ意味——…………… 青 木 順 子 23

多重 wh 疑問文のバランス …………… 杉 山 正 二 45

「母」からの転落

——*Free Fall* の精神分析的読解——…………… 井 上 彩 67

執筆者紹介

活動報告, 投稿規定

学会会則

認知意味論の観点からドイツ「哲学的人間学」の伝統を再考する

青 木 克 仁

Abstract

本論考では、人間を「欠陥動物」と位置付けたドイツの「哲学的人間学」を再考し、哲学的人間学が「欠陥動物」と呼ばざるを得なかった人間的条件が、認知意味論が明らかにした言語習得のための条件に合致し、「欠陥動物」ゆえに却って言語習得が可能となったという逆説的結論を導き出す

序 論

前回の論考において、私達は自閉症の少女、ナディアの絵画作品との類比で、前・現生人類は、自然主義的なリアリズムによるかのような躍動的、写実的な絵画を残しているがゆえに、現生人類のように、言語習得が可能ではなかったのではないのか、といったハンフリーの卓見を紹介した。そこでこの卓見を検証すべく、前・現生人類の如何なる特性が言語習得の妨げになるのかを調べるために、前・現生人類と高等類人猿には連続性があるという仮説の下、チンパンジーにおける言語訓練や、天才猿の異名で名高い、「カンジ」という名のボノボの訓練記録を調べてみた。その結果、少なくとも写実的洞窟絵画に優れていた前・現生人類それから自閉症の少女、チンパンジー、ボノボは、皆、写真的な記憶力に優れていたが、そうであるがゆえに、「アイコニック・レファレンス」の段階で躓きを覚え、言語習得を可能にする「シンボリック・レファレンス」の段階にまで登っていくことができなかったのではないのか、ということを取り敢えず論証したつもりだ。それでも、大変興味深いことに「幼形成熟」の萌芽が認められるボノボの場合は、生誕した直後の極々短い間、普遍名詞を習得し得る臨界期が存在していることは、サヴェジ＝ランボーの「カンジ」の実例が示している通りである。

特にこのカンジの事例で注目すべきは以下の点である。ボノボは社会の中で子育てをするゆえ、マタタはカンジの母親同然であったが、サヴェジ＝ランボーの下で、

あまり優秀な学習者とは言えなかった。マタタの言語訓練の間、カンジは彼女の身体に纏わりついていたり、研究室を自由に駆け巡ったりして遊んでいた。つまり、意識的な訓練を施されていないにもかかわらず、何とカンジはマタタが訓練されても決してうまくできなかったコンピュータ・スクリーンに並べられている抽象記号をほとんど習得してしまっていたのだ。サヴェジ＝ランボーが新たな抽象記号を持ち運び可能なスクリーン上に加えても、カンジはそれをたちどころに習得し、自ら積極的にコミュニケーションをとるようになった。つまり、カンジは、幼い人間の子どもが学習するのと同じようなやり方で基本的な言語を習得していったのだ。この事例が示唆していることは何か。「幼形成熟」ゆえに、「Eidetic memory」に邪魔されることなく、人間の言語の習得が可能になるという仮説が正しいとしたら、ボノボの言語習得の臨界期は人間の子どもよりももっと短く、その間に学習しなければ、言語学習は大変困難になるということなのだ。実際に、大人になって訓練を施されたマタタの場合、2年間に渡って3万回もの試行を経てようやく6つの記号を習得したに過ぎなかった。それを幼少のカンジは、特に訓練の対象とされていたわけではなかったにもかかわらず、習得し得たということである。このことは、言語の臨界期に関して、大変興味深い仮説を立てることを許してくれることだろう。即ち、言語の習得のための条件として、人間の神経系統の未熟さということが却って有意に働くという仮説を、である。私は、一つの面白い仮説を提示しているということをもう一度強調しておきたい。即ち、言語習得の条件として、「幼形成熟」的宿命が与える決定的な未熟さという欠陥がなければ、言語習得は可能ではないという仮説である。

ハンフリーの自閉症の患者と前・現生人類との間の「類比による議論」が正しければ、前・現生人類までは、以下のような進化論的な説明の可能性を残していることになる。つまり、人間を高等類人猿の進化の延長線上に生まれてきたものとする最もお馴染みの進化論的な説明がそれである。これはチンパンジーのような大型類人猿のタイプから一直線に人間の進化の過程を導出するものである。この説明によって、前・現生人類は、チンパンジーのような大型類人猿が進化の過程で発達させてきた

「Eidetic memory」即ち、「写真的記憶力」を受け継いでいることになる。恐らく、前・現生人類までは、大型類人猿からの進化の延長線上に置くことができるのかもしれない。

けれども、この路線で考察を進めると、現生人類を大型類人猿の直系とする構図に、どうしても「失われた環 (Missing-link)」、即ち、生物進化過程を一繋がりとの連続体と見做した場合、連続性が欠けてしまっている箇所、を書き込まざるを得なくなってしまう。これは解決し得ない問題になってしまうだろう。なぜならば、先述した人間の特殊位置が事実ならば、「失われた環」に位置付けられる中間動物の中に対立的特徴を押し込めることになってしまうからだ。言い換えれば、この古典的方法とでも呼べるやり方で「失われた環」を埋めようとする、現実にはおよそあり得ない矛盾に満ちた「キメラ」を探し当てねばならないことになってしまうのである。例えば、「写真的記憶力」を持つと同時にそれを失っているような中間的な存在を想定しなければならなくなるだろう。このような矛盾を抱え込むことなしに、また「創造説」のような神話に退行してしまうことなしに、現生人類の誕生を説明し得るだろうか。本論考が提起する問いは、まさにこれである。

本論考では、ドイツの「哲学的人間学」の知見やフロイト・ラカンの精神分析の知見をも踏まえた上で、人間の幼児期における状態こそが言語習得を可能にする条件を備えていることを明らかにしていけたらと考えている。

§1. ドイツ「哲学的人間学」の系譜

マルクスは、『経済学批判要綱』の中で、猿の解剖が人間の解剖の鍵になるのではなく、逆に、人間の解剖こそが猿の解剖の鍵になるという言葉を書いている。単純な構造を先ず理解し、それから類推して、より複雑な構造を持つ人間の理解に移る方が方法としてはよいだろうと常識は教える。しかし、マルクスは、私達が人間であるがゆえに、先ず自分自身のことを理解しようとすれば、そのことによって十全に進化した人間の構造が解明されるに至り、そこから遡ってより単純な構造が理解し得るようになって考えた。確かに、アイディアとしては大変面白いが、この発想の問題点は、マルクスが、ここで進化の連続性を考え、人間を進化の「頂点」とし

て扱っているという点である。フロイトは、『精神分析入門』の中で、進化論を、地動説や自分自身の精神分析と並んで、脱・人間中心化に向かう運動と捉えていた。けれども、人間を進化の頂点に据えてしまうのは、脱・人間中心化に向かうはずの進化論に再び人間中心主義の軀を嵌めてしまうことになりはしないだろうか。マルクスが前提にしていた、この進化の連続性に「断絶」があるとしたらどうだろうか。

この「断絶」の存在を明るみに出した学派が、ドイツの「人間学 (Anthropologie)」であるが、「人類学」と区別して「哲学的人間学 (Philosophische Anthropologie)」と呼び習わされている伝統である。ドイツの哲学的人間学の系譜に連なる学者達、生物学者、ユクスキュル、ボルク、ポルトマン、グールド、古生物学者、ルロワ＝グーラン、哲学者、シェーラー、ゲーレン等は、人間は生物学上の見地から見れば、「欠陥」ないし「負担」を徴標としているとしている。哲学的人間学の流れは、その一部はハイデガーに辿り着き、更には「鏡像段階」理論を唱えたジャック・ラカンの精神分析にまでも深い影響を及ぼしているゆえ、現代思想を語る上でも欠かすことのできない伝統と位置付けていいだろう。

§2. 三人の先駆者、ショーペンハウエル、ユクスキュル、ヘルダー

ゲーレンは、「哲学的人間学」の先駆者として、ショーペンハウエル、ユクスキュル、そしてヘルダーの名前を挙げている。ヘルダーを最後に挙げているのには後で説明するように理由があるので、ゲーレンが列挙している順番で、先駆者とされている先人達の研究成果を紹介しておこうと考える。

ショーペンハウエルは、動物の有機構造と環境の調和を考察するための現代的視点を初めて見据えた哲学者として高い評価を受けている。特に、ショーペンハウエルは、『自然における意志』という著作中に「比較解剖学」の章を設けており、後にユクスキュルが「環世界」と命名した動物の有機構造に合致した環境を考察している点が高く評価されている。ゲーレンは、ユクスキュル以前に正確に動物の生態を把握していたとして、以下のように述べる。「各動物の意志、性格一つまり衝動と本能の体系一、その器官の特殊化および生活情況、それらがすべてぴたりと調和

しあうことが示されている」(80)と。ショーペンハウエルは、動物がその生活様式において、環境に細部に至るまで見事な適応を見せ、身体の一部が無駄なく環境に合致している様を描写する。「動物身体のいずれをとって見ても、各部はたがいに、またその生活様式に何と厳密に即応していることだろう。たとえば、鉤爪は獲物を捕らえるに巧みであり、歯はその肉を引き裂くに堪能であり、腸はこれを消化でき、肢は獲物目指して体を運ぶにかない、その器官はどれ一つとして活用されぬものはない」(80)といった具合に。

ユクスキュルは、動物の有機的構造とその「Umwelt (環世界)」の整序関係を探求した生物学者である。「環世界」の概念が衝撃的なのは、人間が動物を擬人化し、動物に人間固有の世界を押し付ける無邪気な傾向性を廃し、動物がその種固有の感覚器によって受容する知覚刺激からなる環境が存在していることを最初に理論づけたことにある。このことこそ、彼の偉大な業績なのである。動物種はそれぞれに特有の「環世界」をもちこれを統御し経験する特殊器官を備え、己の「環世界」に合致し調和して生きている。それゆえ、ゲーレンが言うように、或る動物の感覚器と実行器を知れば、その「環世界」は復元可能であると言い得る程、見事な調和を見せているのである。ユクスキュルの言い方を借りるのならば、「各種の動物が刺激を感受するには対応する感覚器官を備えねばならないから、自然はこれに必要最小限をこえる感覚を許さぬという方策を徹底するのである」(85)。ただし、飼い慣らされて本源的行動を忘れた家畜化された動物は例外的であるとしている。

残念なことに、ユクスキュルが学説を発表した当時は未だローレンツの通説が確固たるものではなかったため、ユクスキュルは本能概念の導入によって己の「環世界」の教説を強化することができなかった。「環世界」に嵌め込まれて生きる動物の感覚受容器官は特殊化を被り、受容した知覚刺激に対応した本能的な行動図式を対応させているということは、ローレンツ以来知れ渡った事実となっている。

ゲーレンによるユクスキュル批判で特筆すべきは、ユクスキュルが動物界に見られる「環世界」という発想の成果をそのまま人間一般にも拡張してしまった点への批判である。これは、ゲーレンにとって、ユクスキュルの発想の成果を台無しにしてしまうような欠点に映った。なぜならば、「環世界」概念を人間にまで及ぼしてし

まうことは、人間と動物を分ける第一級の区別が払拭されてしまうことになるからだ。ゲーレンは、「生得の自然環境に関わる本源的かつ純粹本能的な動物の行動図式を、人間行動のきめ細かに分節される文化圏に応える獲得的な特殊化と取り違えるのである」(87)と述べ、本能概念が未だあやふやだった時代に発表された学説の限界を指摘する。言い換えれば、動物には「環境 (Umwelt)」がある代わりに、人間には「第二の自然」または文化圏がその欠如を補っているのである。かくて、次章で詳述するマックス・シェーラーが「世界開放性」と呼んだ種固有の「環世界」に鎖されないあり方、あるいは、フロイト以降の精神分析が「本能が壊れた動物」として人間を規定する際の「本能減退」を補う言語的存在者としての人間のあり方は、確かに人間存在の生存に不安定さを持ち込むことになったものの、ちょうどこの不安定さと表裏一体の柔軟性を可能にし、真正の本能の代理をする「文化」と呼ばれる準本能的な社会連関を可能にし、進化論的には説明し得ないような飛躍を人間存在にもたらすことになったのだ。人間には、他の動物と比較した場合「欠陥」とさえ言い得る特徴があるが、むしろその「欠陥」ゆえに「文化」あるいは「制度」なるものが誕生してきた。動物の場合は、種の「維持」、生活、生殖のために満たされる種に特有な「環世界」において、本能行動を活性化する知覚刺激を受容する有機的統一が認められる。だが人間という種は、他の動物のように種に固有の「環世界」を構造化し、本能の導きによって「環世界」との有機的調和の下、生を営むということがない。言い換えれば、人間はそもそも何か種に固有の特定外部条件に有機器官的に嵌め込まれて生きるということはない。「環世界」は動物種と環境との調和をもたらすが、人間の場合、強いて言えば「子宮内環境」は「環世界」との類比で捉えることが可能だろうが、幼形成熟の宿命を担って生誕した後は、周囲の大人の助けなしには、環境との原初的な不調和による悲劇的な状態を耐え抜くことは到底できない。

さて、三人目の先駆者は、ヘルダーである。早くも 1772 年に書かれた『言語起源論』からゲーレンが引用している箇所を確認しておこう。「人間は、本能の強さと確かさにおいてはるかに動物に劣ること、いや、幾多の動物種に生まれつき備わる工

作能力および工作衝動と呼ばれるものは人間に些かもないこと、それは確かである」

(91)。ヘルダーはユクスキュルの「環世界」に相応する「動物圏」と彼が呼んだ概念を提唱していた。「動物圏」とは、動物が「生まれ落ちれば既にそこに在り、生涯をそこに滞り、その生を全うする」(92) ような、各動物種に固有の生活圏のことを指す。ヘルダーはそれぞれの動物の「動物圏」を比較し、動物の「感覚が鋭くなり、その工作物が巧緻を極めるほどに、生活圏は狭まり、その作品は単純になる」(92) ことを指摘した。ゲーレンは、それを「不思議な逆比例関係」と呼び、「その領域が狭まれば、動物たちの能力はそれだけ確実かつ完全になる、ヘルダーとともにそう言うてよかろう」(92) と結論する。ヘルダーが言うように、限りなく細やかな感覚が小さな圏内で一つのもをを目指して閉じ籠れば、その感覚にとって他の全世界は無なのである。例えば、ユクスキュルが挙げているマダニの例をとれば、マダニにとって哺乳動物が発する「酪酸」の知覚刺激だけが、「酪酸」目掛けて落下するという本能行動を喚起するが、その時、マダニの「環世界」という小さな圏内では、マダニの受容器官にとって、「酪酸」以外の刺激は、ヘルダーが言うように「無である」ため、何の本能行動も還帰し得ないのである。ヘルダーは、これに劣らず確かな眼でまた人間を見極め、人間は「欠陥動物」であると(92)する、ゲーレンの「哲学的人間学」に引き継がれるテーゼを提唱する。先ほどと同様に、ゲーレンによるヘルダーの引用箇所を確認しておこう。生まれたばかりの人間の子どもは「その想念も衝動も、動物ならば各種各様に発する声によってこれを表出することもままならない。動物たちのただなかに置かれた人の子とは、つまり自然の孤児なのだ。丸裸の、露わな、ひよわで貧相な、おずおずとして丸腰の、そして悲哀をきわめることには生活の水先案内を奪われている」(92-93)。人間に妥当するものは、ヘルダーによれば、動物からみるとまさに否定的な特徴となる。「その類を束ねる性格」はさしずめ「不備欠陥」(93)であるとしている。人間の場合、先ほど例に挙げたマダニとは異なり、その感覚と有機構成は一つの物に向かって研ぎ澄まされていないわけで、マックス・シェーラーの言う「世界開放性」即ち、万象に向けて開いているのである。ヘルダー風に言い換えれば、人間の場合、その魂の力は世界に広がっているのである。人間は従って、「環世界」といった意味合いの「環境」をもたない。ヘルダ

一の名をとりわけ先駆者たらしめるのは、ヘルダーがこの人間という種の「不備欠陥」の「補充」の問題にいきあたって、「言語」を、この「欠陥」の代償として導き出したことにある。人間の知性は動物の有機構成の延長線上に捉えられ得るものではないというヘルダーの驚くべき知見は、後のジャック・ラカンの思索にも繋がっている。それゆえ、ゲーレンは、誰よりもヘルダーの名をユクスキュルよりも重要な名として最後に挙げた上で、最大限の賛辞を送っている。「哲学的人間学はヘルダー以来一歩たりとも前進していない。…現代の諸科学を足掛かりにして展開しようと思う基本図式は、まさにこの見地にほかならない。それは何も前進するにはおよばない。なぜなら、それは真理だからである」(94) と。

§3. マックス・シェーラー、「哲学的人間学」の提唱

マックス・シェーラーは、「人間」という概念が含む、矛盾をも引き起こすゆえ、彼が「悪質な二義性」と呼ぶ特徴を指摘している。先ず、「人間」という言葉が、脊椎・哺乳動物の下位部門として人間が形態学的に備えているという意味において使用されている。彼は、これを「人間の自然科学的概念」と呼ぶ。つまり、人間として特徴づけられた生物は動物という概念に従属しており、「動物」と一括される集合の比較的小さな下位概念を形作っている。

これに対して、「人間」という概念は、「動物一般」の概念に極めて鋭く対立した事柄の総体を指す言葉としても使用されている。シェーラーは、こちらの方を「人間の本質概念」と呼んでいる。もし人間に、特殊な地位を認めることができるのであるのならば、この「人間の本質概念」の方を拠り所にできるかどうかというところに思索の糸口がある。実際に、シェーラーの論考は、一つの特権地位を人間それ自身に与えるこの「本質概念」が、一般的に正当なものであるかどうかを主題にして執筆されたのである。

人間の特殊地位というものは、これまでに積み重ねられてきた知見に基づく、生命的・心的世界の全体構造を検討する時に初めて明らかになり得るだろう。従って、シェーラーは、人間が特殊地位を有するかどうかを見極めるために、生命的・心的

世界の全体構造を見直すという課題を引き受け、科学が解明し始めている心的諸力の段階系列を検討していく。

最初のものは「感情衝迫」だが、心的なものの最下位の段階で、食物摂取や性充足等「～に向かって」という形で特殊な方向性と目標性を常に備えている。とりとめのない快と苦というものが、感情衝迫のただ二つの状態性ではあるが、生物の活動エネルギーを供給する動力源でもある。

二つ目が「本能的行動」で、本能は絶えず種に仕える。と言うのも、本能行動は、個体に応じて変化する環境世界の特殊内容に対する反応ではなくて、専ら環境世界のその種に特有な配置、というものに対する反応に他ならないからである。種に仕えるという性質を有することに対応して、生得的であり遺伝的であることを基本的特徴とする。外界からの知覚刺激は、本能活動の知覚刺激に対応づけられたリズム的に固定した行動を触発することになる。動物が何を知覚刺激として受容し、それに対して如何なる行動を出力するのかは、環境世界の構造に対して動物の生得的本能が有する関係によってアプリオリに支配され規定されている。

三つ目が「連合的原理」である。行動が有意性を増していく度合が試行の回数に依存し、有意な試行の場合を心的「連合」によって定着させていく。この水準の行動において、メルロ=ポンティなら、「信号」による行動の再編成が可能になると言うだろう。「信号」の場合、記号は一つの前ぶれ、前兆として捉えられる。知覚刺激を「信号」として学習し、「信号」から有意な行動をそれに対する反応として生起させる。「連合的原理」は習慣性の原理であって、学習する余地はあるものの相対的には、「信号」に反応する一対一対応的な行動を出力するという硬直性が見られるが、その学習可能性に開かれているという点において、シェーラーに言わせれば、「保守的原理であるにしても、本能に比較すれば、既に解放の強力な道具である」(39)ということになるだろう。

四番目のものが「有機体に結びついた実践的な知」(40)と呼ぶものである。この段階にきて、選択能力と選択行為という「知能的行動」に相応しいものが登場する。或る行動を「知能的行動」と呼ぶための条件とは何だろうか。或る生命体が、その種の型に当たる「本能行動」にも、過去の試行の積み重ねで得た「連合的原理」に

よる「信号行動」にも当て嵌まらない、全く新しい状況に直面して意味に適った行動を遂行し得るのならば、まさにその時に限って、その生命体は「知能的行動」を遂行しているのである。

最後のものこそが「精神」であり、シェーラーは、これを「人間を特徴付ける新しい原理」(47)と呼んでいる。もし、既に動物にも知能があると認められるのならば、そもそも人間と動物の間に単なる程度の差以上のもの、本質的区別というものがあるのかという問いに対して、シェーラーは、「新しい原理」は、私達が最も広義において「生」と名付け得るものの外部に存すると宣言する。シェーラーは、この新しい原理を「精神」と呼んでいる。「精神」という、人間に特殊地位を与えるとされる「本質概念」とは何なのだろうか。

私達は、シェーラーに倣って、人間本性を、存在の諸段階を、人間以外の動物にも共通する下位に位置する段階、即ち、「感情衝迫」から最後の「精神」に至るまで、一段ごとに梯子を登るかのように再認の作業を行ってきた。ここで確認しておきたい重要なことは、その再認作業の結実として、実は「世界と自己とを意識し、己自身の心身上の本性をも対象化する」という「精神」の根本徴標を確認していたということなのだ。低次の「感情衝迫」から「精神」に至るまでの道程を鳥瞰し得るこの「精神」と呼ばれる次元は、かくて一切を対象化し、自らは対象となることのないという「精神」の根本徴標を確認させてくれたのである。私達は低次から高次に至るまでの「生の梯子」をシェーラーに導かれて辿り始めた時に、その「生の梯子」を鳥瞰している「精神」の視座に身を置いていたのである。もし人間が自然全体の外に身を置いて、自然全体を「対象」にしたのであるならば、人間は震撼しながら己を振り返り、以下のように自問するだろう、とシェーラーは述べる、「一体私自身はどこに立っているのか」と。世界の一部であると同時に世界の外に立つという、かつて神の創造の問題として提起された問題を、今度は人間が引き受けるという構図が浮かび上がってきた。これはウィトゲンシュタインが後に『トラクテイタス』において表明していた問題でもある。

だとすると、人間の眼差しはこのように振り返ることで、「絶対的無」の中に観入

していくのだが、「何故そもそも世界というものが存在し、何故他ならぬ私が存在するのか」という問いが、この観入の中で浮き彫りになってくるのである。それゆえ、シェーラーは、この「精神」と呼ばねばならぬものに関して、「人間を『人間』たらしめる唯一のもの、それは生の或る新しい段階というものではないし、ましてや『心』という、この生の一つの表示形態の一段階にすぎぬものではない。むしろ、それは、全ての生一般に、否、人間の生に対してすら対立する原理である」(47)とまで言い切るのである。その限りにおいて、「精神」は最も広義において「生」と名付け得る全てのものの外部に存することになるだろうし、「一般に『自然的な生命進化』には還元することのできないもの」(47)ともされるのである。

するとその帰結として、「精神的存在者」は、もはや衝動や環境世界に繫縛されてはいないのであって、「環境世界からの自由」(48)であるということになるだろう。ユクスキュルの「環世界」の構造は生命体の有機体的な特性に、言い換えれば、知覚刺激に対する反応としての行動という一つの厳密な機能的統一を形成している構造に、正確にかつ完全に「閉鎖的」に適合している。しかし、「精神」を有する人間は、こうした「閉鎖的」な適合—メルロ=ポンティなら「癒合的形態」と呼ぶ適合—の束縛を受けない自由を享受する。シェーラーは、こうした精神的存在としての人間にのみ可能な自由を「世界開放性」と呼ぶが、これは人間以外の動物が縛られている環境世界の桎梏からの原則的脱却を意味するのである。人間は、動物と異なり「世界開放的」に行動し得るのである。「環世界」に癒合しているだけの動物はいかなる「対象」をも持たないだろう。何故ならば「動物はおのれの環境世界の中へと自己を没入して忘我的に生きるのであって、いわば蝸牛がその殻を持ち歩くのと同じように、動物は、おのれの環境世界を構造として、おのれの出向くところへはどこでも持ち運ぶ」(51)からである。動物にはこの「閉鎖的」に適合してしまっている環境世界を対象にすることは決してできないのだ。環境世界から独自の仕方距離をとって、「対象」として扱うことで、「世界」とする働きは人間にのみ可能なのである。動物は己の有機体的状態を決定づける「環世界」と呼ばれる「環境世界」に本質的に巻き込まれているので、その現実を「対象的」に把握することがあり得ない。「精神」とは、「環世界」から解放され、それに代わって、現実を対象化し「世

界」を構築し始めた人間の「本質」を規定する指標なのである。

§4. アドルフ・ポルトマン、「生理的早産説」

アドルフ・ポルトマンは『人間はどこまで動物か』の「まえがき」である「現代の人間研究における生物学の役割」にて、現代の「人間学 (Anthropologie)」には決定的な方向転換がおこっているとしている。人間が猿から進化したものという動物性が強調される研究が重ねられてきたのに、人間は動物とは違うという人間の本質的特徴を再認しようという動きが出てきているとしている。この動きに正しく呼応するためには、哲学的研究と生物学の認識との総合が不可欠で、両者の共同によって人間の生物学的形態の完全な特殊性を、人間の生物学的な発生・発達の特異性と比べつつ、このような特殊な生成過程が人間特有とされる存在様式を如何にもたらしめたのかを解明する必要がある。ポルトマンは、生物学研究によってこそ、このような人間の問題を解明し得るという常識的考え方が研究の盲点として働くことで、人間の重要な特性が見過ごされてしまうということを強調している。高等哺乳類にも当て嵌まる法則から、人間が如何にかけ離れてしまっているということに注意が向かなくなってしまうとしている。このことを明らかにするために、先ずポルトマンは以下の二つの概念を明確に区別し、人間がどちらに分類されるべきかを考察している。

①就巢性（「巣に坐っているもの」）：あまり特殊化していない体の構造を持ち、脳髓がわずかししか発達していない動物群は、大抵短い妊娠期間しか持たず、一度に生まれる子どもの数も多く、新生児の状態は、毛が生えておらず、閉じられた目で、頼りない能無しの状態である。

②離巢性（「巣立つもの」）：身体構造はいっそう特殊化され、脳髓も大きく複雑になっており、妊娠中の母胎内での発育期間は大変長く、一度に生まれる子どもの数は少なく、新生児は、遥かに発育を遂げ、その姿や挙動は既に親に大変よく似ている。

この二つのカテゴリーのいずれかに人間を位置付けようとするとき、人間は「巣立つこと」のできない「巣立つもの」という奇妙な特性を有することが分かる。これ

をポルトマンは、「頼りない、能無しの巣立つもの」(60)と呼ぶ。人間は、特に脳髓の大きさという点において「巣立つもの」の性質を共有しているにもかかわらず、生誕後は、「巣に坐っているもの」と同じく、全くの能無しの状態であるからである。実際に、人間の脳髓が、類人猿よりもほぼ3-4倍も重いことに応じて誕生時に既に3倍も重い脳髓を持っている。生誕とともに、この寄る辺なき存在であることを思い知らされる人間は生後1歳になって、真の哺乳類が生まれた時に実現している発育状態に遅ればせながら辿り着くことになる。つまり、人間は、約1カ年も早過ぎて誕生してしまうということを意味している。人間の誕生時の状態が、一種の「生理的」早産であるという、このポルトマンの理論こそが「生理的早産説」として彼の名を歴史に残している。

かくて「生理的早産」を宿命として引き受けざるを得ない人間と人間以外の動物では、本能体制の意味が大変違う、という事実から出発することが重要である。動物の場合は、あらゆる本質的な行動様式が、「本能」と呼ばれる生物学的な前提から規定されているのに、人間の場合では、もっとも本能的と言われる行動の部分、例えば、セックスの領域においてさえ、個人的な決定という、遙かに自由な選択が忍び込む余地が残されている。生殖活動という意味を失っているような性行動を選択的に実践することは、人間の生が、有機的、生物的生に対して接岸していないということを示唆する。生殖活動のように直接に種の保存には関係のない他の生活領域では、この自由な決断という可能性はさらにいっそう大きいということも否定できない事実なのである。ポルトマンの用語を借りれば、こうした人間に特有の事態こそ、「本能体制の相対的な弱体化」を表していることになるだろう。ポルトマンは「このあらかじめ定められた本能的な行動様式が、この人間にはわずかしき発達していないことに対応して、人間には生活空間としてどんな一定の環境も、特定の自然の範囲もわりあてられてはいないということが生じている」(88)と述べている。動物の本能的な行動を「環境に制約された(Unweltgebunden)」と呼び、それに対して「本能体制の相対的弱体化」ゆえに人間の行動は「世界に開かれた(Weltoffen)」ものとなっている。人間以外の動物はその動物種固有の環境に本能的に縛られているが、人間の場合は、言語による「表象能力」によって、「今ここ」を規定する知覚

刺激に囚われることなく、時間的にも空間的にも遠く離れて、感覚的には与えられていないものを心の中に想い描いたり、「今ここ」に拘泥することなく、部分的に与えられている知覚刺激を補ったりすることで多面的に表象することができるようになった。かくて、「本能体制の相対的弱体化」という人間に顕著な欠陥は、言語による「表象化能力」によって補填されるようになった。その結果として、自然と対置される「文化」と呼ばれる、人間の特別な世界が構築されるようになるのである。

ポルトマンの考え方の新しい点は、人間に特有なものは、他の動物と共通とされる「動物的な前段階」を通過した後で、初めて発生するという考えを退けた点にある。「生理的早産」に起因する人間の緩慢な発達が、却って人間の「世界に開かれた」存在様式を決定づけるものになっていることを発見したことの意義は大変大きい。

ポルトマンが述べているように、本能から規定された行動様式に拘束されていることを「求心的 (Konzentrisch)」と呼ぶのに対して、人間が本能的規定から脱け出せる可能性を「遠心的 (Exzentrisch)」と特徴付けることができる。確かに、動物の場合は、本能によって予め定められた環境からの知覚刺激を手掛かりにして、嗅ぎ回り、探し求め、見つけたり捕えたりするといった行動を出力することしかできない。つまり、動物の行動は、環境に拘束され、本能によって保障されているので、環境の激変でも起こらない限り、安定した行動様式が繰り返されることになる。これに対して、人間の場合は、本能に規定された知覚刺激を受容するということがそもそも生じないがゆえに、表象をし意味付与をしない限り、そのままでは混沌とした「世界」に開かれてしまう。ゆえに、人間は動物とは異なり、「意味」を構築することから始めなければならないということになる。「文化」と総称される人間の存在様式全体が、そのままでは混沌としたものと化してしまうだろう、一つの自然領域の中に特別な人間の「世界」を創り出すのである。ハイデガー風に言えば、人間は「世界形成的」であり、人間の行動によって形を変えられた自然の材料から「世界」を創り上げねば生存していくこともままならないのである。

§5. アーノルト・ゲーレン、「哲学的人間学」の集大成

ゲーレンは、彼の主著である『人間』の第一部「人間の形態学的特殊地位」において、高度に特殊化された、つまり種特有の環境に適応した器官を徹底的に欠如しているところにあることをもって、「欠如」を被るものとしての人間存在を「哲学的人間学」の中核的命題として掲げる。既に、ボルクやポルトマンの学説によって周知のこととなっていることだが、個体発生的に見れば人間は胎児の状態を保っており、系統発生的には、比較解剖学の成果によれば、人間の器官は、そこに現れる進化法則上の構造からみて、「非特殊化」という意味合いにおいて原初に属する、とゲーレンは述べる。

この原初に属するとされる、胎児的な、あるいは古態的な「人間の形態学的特殊地位」を説明するのに、進化ならぬ「退化」に訴えるとしたら、どうだろうか。一度失われた機能は二度と取り戻せない、と「ドロの法則」はいう。そのような退化は特殊化における部分的プロセスである。この法則はまた、特殊化が達せられると、もう後には戻れないと述べている。つまり、一旦特殊化した器官が特殊化していない器官に、つまり原初の時点に遡って退行的に進化できるということはあり得ないということだ。

人間を除く哺乳動物は、特殊化した器官を有するよう進化していくことで、「環境」との調和を達成している。これはユクスキュルの「環世界」論が示している通りだろう。言い換えると特殊化の過程を歩むことは、有機的進化の終局目標であって、哺乳動物は、人間を除く全てが、これを達成しているのである。

そうであるのならば、人間の器官がそもそも、非特殊化的、つまり胎児的あるいは古態的であるのなら、人間を進化論上に位置付けて考える際に大きな躓きとなるという意味で根本問題となろう。

人間を進化論的に説明する際には二通りの行き方がある。最もお馴染みの進化論的な説明は、ゴリラ、オランウータン、チンパンジー、ボノボのような大型類人猿のタイプから人間の進化の過程を導出するものである。けれども、この路線で考察を進めると、人間を大型類人猿の直系とする構図に、どうしても「失われた環(Missing-link)」、即ち、生物進化過程を一繋がりの連続体と見做した場合、連続性

が欠けてしまっている箇所、を書き込まざるを得なくなってしまう。これは解決し得ない問題になってしまうだろう。なぜならば、環境に適応し得る特殊化した器官を持ち合わせていないという人間特有のこの特殊位置が事実ならば、「失われた環」に位置付けられる中間動物の中に対立的特徴を押し込めることになってしまうからだ。即ち、環境に適応し得る特殊化した器官を持ち合わせていると同時に持ち合わせていないという、まさに「キメラ」の名に相応しい矛盾した形態をその本質とする、「類人猿」と「現生人類」の中間物を探し当てねばならないということになる。言い換えれば、この古典的方法とでも呼べるやり方で「失われた環」を埋めようとすると、現実にはおよそあり得ない矛盾に満ちた「キメラ」を探し当てねばならないことになってしまうのである。

もう一つのやり方においては、大型類人猿からの一直線の進化の道程を放棄し、人間化すること自体を特殊事例と考えた上で、現生人類の出現を周知の進化法則において一つの特異法則を導入しなければ納得できないものと考え、初めから人間の特殊位置を認めてしまおうとする。この場合、種特有の環境に適応した器官を徹底的に欠如した胎児的あるいは古態的な、そもそも進化の道筋を初めから辿ることのなかった生物と仮定してしまうか、あるいは、進化の終局目標である特殊化を被らないという人間の異常さを説明するための補充仮説を進化論の通説と矛盾しない形で打ち立てなければならないという難題が待ち受けることになるだろう。人間を直接に動物から導き出そうとすれば、人間の器官が非特殊化的であるという、進化の終局にあるべきではない原始的特性を、特殊性を得ようと進化に向かう前進的状态から導出しなければならないという袋小路に陥ってしまうことだろう。

ドイツ「人間学」の系譜に連なる思想家並びにその先駆者とされる思想家達は、こうした難題と向き合い、一つの解決策を提示する糸口を見出した。ドイツ、哲学的人間学の系譜に連なる学者達、生物学者、ユクスキュル、ボルク、ポルトマン、グールド、古生物学者、ルロワ＝グーラン、哲学者、マックス・シェーラー、アーノルド・ゲーレン等は、人間は生物学上の見地から見れば、「欠陥」ないし「負担」を徴標としているとしている。動物は本能によって世界を規定しており、ユクスキ

ユルはそれを「環世界」と呼んだ。人間は本能による規定が殆どないゆえ、世界は未規定のままだが、この混沌を放置すれば当然それは死を意味する。ゆえに、混沌とした未規定な世界を本能に代わって文化が埋め合わせるのである。ゲーレンは未規定な世界を個々の人間が一から規定するのではなく「文化」を学習することで習得し得ることから、文化の機能を「負担免除」という言い方で表している。「文化」が「負担免除」の機能を持つがゆえに、「欠陥動物」たる人間は生存可能になったとしている。

結 語

人間を「欠陥動物」と位置付けたのは、鋭いアフォリズムを得意とするニーチェであるとされるが、「哲学的人間学」の系譜に連なる思想家達は、このニーチェ的な発想を共有している。こうしたニーチェ的な発想は、ドイツ「哲学的人間学」から、ジャック・ラカンにも引き継がれている。

ラカン研究者の向井雅明は、『ラカン入門』の中で、ラカンは「鏡像段階論」をオランダの解剖学者ボルクの理論によって説明しようとしたとしている。ボルクの理論は「胎生児化説」と呼ばれ、霊長類の胎児においては一時的に過ぎない形態を、終生保持しているのだとされる。これを「ネオテニー」と呼ぶが、この言葉は「幼形成熟」と訳されている通りで、身体的発達の遅延によって、成熟した個体に幼形が保たれていることを意味する。ボルクは「哲学的人間学」の系譜の中で重要な位置付けを与えられている学者で、ゲーレンに与えた影響は多大なものがある。また今回取り上げたポルトマンによってその一部の学説が批判されているが、ボルクの発想はポルトマンの「生理的早産説」にも批判的に引き継がれていることは否定できない。なぜならば、ポルトマンの「生理的早産説」もボルクの「幼形成熟論」の一種であるからで、人間が猿に比べると早い段階で生誕することを強調することで「幼形成熟」の観点を取り入れているからだ。大脳新皮質が付け加わることで脳の容積が大きくなってしまった人間は、「巣立つもの」のように、或る程度成熟してから生まれてこようとすると、産道を通することができなくなってしまう、人間が子孫を残し続けていくためには、未熟なまま生み落とされるしかなくなってしまう

ったのだ。

この関連で、「妊産婦死亡率」を、例えば「日本産婦人科医会」の統計資料（2010年1月～2016年4月）を見ると、全国で298人の妊産婦が死亡しているのが分かる。この6年余りの死者数は毎年50人前後と横ばい状態で推移している。この時期の出産件数が年間100万人ほどだから、妊産婦死亡率は1%に満たないということになる。死因としては、①子宮内大量出血、②血圧の上昇による脳出血、③羊水塞栓症が挙げられている。人類以外に出産で母親が死亡するというケースはない。成人の脳は1200立方センチあるがこれだけの体積は産道を通らないし、400立方センチある新生児の頭でさえ大き過ぎるくらいである。それゆえ、人類は「生理的早産」を宿命として担う他に子孫を残すことができなくなってしまったのだ。

かくて、人間の赤子は、未熟児のまま生誕するがゆえに、神経系も未熟なままの状態、身体に関する全体像を教えてくれるような統一感覚を持ち合わせておらず、外界を媒介する五感を通してバラバラの感覚の寄せ集め程度の身体イメージしか持ち合わせていない。人間は、本質的に未熟児として生誕するという宿命を担うがゆえに、自立もままならず、「巢に坐っているもの」の様態を持たざるを得ない無能な存在なのである。こうした人間の赤子の寄る辺なき身体に対して、ラカンの言う「欲動のアナーキー」と化した感覚イメージは混沌とした錯乱として現れる。こうした状態を乗り越えるために、「本能」という生得プログラムが機能しないがゆえに、「生き残る」ためには、言語に飛びつき「文化」に代表される「習得プログラム」を学習し、沈黙する本能の代理をさせなければならないのである。

最後に人間の「神経系」の生誕時の未熟さが、言語習得との関係で何を意味するのかについて素描しておこう。

1980年代、認知科学の領域において、神経系をモデル化し、それに基づいて疑似ニューロンを構築し、人間の認知に近似する「人工知能（AI）」を実現しようという動きが見られるようになった。「コネクショニズム」と呼ばれる、神経系をモデルに、パターンによる情報表現を考えるアプローチが認知科学の主流となり、コネクショニズムの成果である「エルマン・ネット（再帰型ネットワーク）」はその後、ディー

プラーニングに基礎を与え、今の AI の爆発的進展の原動力となっているのは周知の通りである。

「ニューラル・ネット」のアプローチは、簡単な「素子（ノード）」と素子の状態を表す信号を伝える結線群からなる。素子はニューロン細胞体に、結線は軸索と樹状突起に対応すると考えればイメージし易いだろう。素子には外部入力に繋がる「入力素子」、外部出力に繋がる「出力素子」、外部入力にも外部出力にも繋がっていない「隠れ素子」と呼ばれている中間素子が存在する。ジェフ・エルマンは「エルマン・ネット」と呼ばれる「再帰ネット」を構築した。これは「隠れ素子」の過去の状態が、処理後の段階で同じ素子に追加的に再入力される「再帰ネット」を有するモデルである。つまり、エルマンは、短期記憶に類似した役割を果たすアーキテクチャーを開発したのだ。この「再帰ネット」の工夫によって、エルマンは、学習パターンを「粗くスタート」させ、徐々に複雑な形を学ばせていく漸近型の学習法を採用ることによって「ニューラル・ネット」に文法パターンを学ばせていった。実際に、エルマンのシミュレーションから、純粹に帰納法的に、文法的に正しい文構造を予測することのできる装置が可能であることが実証された。このことは、包括的な漠然とした知識が、文法学習に有効に働き得るということを証明している。

ポイントは、学習パターンを「粗くスタート」させるということにある。この発想は、まさに、未熟な神経系によって「言語学習」をスタートさせる人間の子どもの場合に類比させて考えることができるだろう。子どもは、チンパンジーやボノボのように、「フォトグラフィック・メモリー」を持たぬゆえ、例えば、樹木の種を一々覚えることができないが、その粗削りな記憶は「木」という、等身大の中間カテゴリーを確実にマスターするには相応しいのである。このように特定の語連合を一々記憶することの不可能性、発話の数語しか、短期記憶し得ないこと、などといった子ども特有の未熟さが却って、言語学習の際には有利に働く。これは、写實的な「洞窟絵画」残すことのできた前-現生人類やナディアのような「フォトグラフィック・メモリー」を持つ自閉症の患者、あるいはチンパンジーやボノボにはできないことなのである。

人間の子どもの「神経系」の未熟さは、カテゴリー学習に役立つだけではない。

「語—対象」の関係から注意を逸らせることによって、アイコンニックな関係で固定されてしまうことなく、記号間の組み合わせの上位パターンの存在に気付くことができるのである。子どもの未熟な脳は、インデクシカルな「語—対象関係」から、記号レファレンスへとシフトする能力を、未熟さゆえに発揮し得る。「語—対象関係」の詳細に拘ってしまったり、「語—対象関係」の因果性に拘泥してしまったりしたら、それで身動きが取れなくなってしまうだろう。実際に、前回発表した論考において検討したように、チンパンジーやボノボの言語訓練の場合にこのことが起きてしまっている。「語—対象関係」の細部に拘泥することのできない、子どもの未熟さゆえの「認知的な粗さ」が、却ってカテゴリー間の差異を確立するには十分な認知的な差異を提供するのである。

人間は、「ネオテニー」という宿命を担い、その所為で、未熟な神経系を有する無能な存在として出発せざるを得ないわけだが、その認知的な未熟さを抱えたまま生きることになってしまったということへの注目が、「哲学的人間論」の系譜に連なる学者達やラカンに連なる精神分析によってなされたことは、大変大きな発見であった。進化の頂点どころか、進化の過程において、産道通過が叶わなくなってしまうほど、大脳を発達させてしまった人間は、「欠陥動物」となることの補完物として言語を習得し易い神経生理学的条件を誕生させたのだ。かくて「未熟さ」や「認知的粗さ」を出発点に据えるという発想が誕生したのである。しかもこの発想が現代のAIの発展にまでつながっている。人間の場合、この未成熟さゆえに、認知的粗さを乗り越えてしまうような干渉が存在しないまま言語環境に晒されることが幸いな偶然として働いたということに驚かずにはいられない。

引用・参考文献（引用頁は本論文中に記す）

- ゲーレン, A., 『人間』, 平野具男訳, 法政大学出版局, 1985.
ジョンソン, マーク, 『心のなかの身体』, 菅野盾樹訳, 紀伊国屋書店, 1991.
スー・サヴェジ＝ランボー, 『人と話すサル「カンジ」』, 石館康平訳, 講談社, 1997.
シェーラー, マックス, 「宇宙における人間の地位」, 山本達他訳 in 『シェーラー著

作集 13』, 飯島宗享他編, 白水社, 2002.

ソシュール, 『一般言語学講義』, 小林英夫訳, 岩波書店, 1940.

立花隆, 『サル学の現在』 上下巻, 文春文庫, 1996.

ディーコン, 『ヒトはいかにして人となったか』, 金子隆芳訳, 新曜社, 1999.

ハンフリー, ニコラス, 『喪失と獲得』, 垂水雄二訳, 紀伊国屋書店, 2004.

ポルトマン, アドルフ, 『人間はどこまで動物か』, 高木正孝訳, 岩波書店, 1961.

モラン, エドガール, 『失われた範例』, 古田幸男訳, 法政大学出版局, 1984.

リーキー, リチャード, 『ヒトはいつから人間になったか』, 馬場悠男訳, 草思社, 1996.

ルーウィン, 『現生人類の起源』, 渡辺毅訳, 東京化学同人, 1999.

レイコフ, G., ジョンソン, M., 『肉中の哲学』, 計見一雄訳, 哲学書房, 2004.

「虚構世界」と「現実世界」：
小説を読む行為と異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (17)
——『手袋を買いに』における母狐の言葉の持つ意味——

青木 順子

要旨：本稿は、異文化コミュニケーション教育における「異なる者との共生」についての考えを明確にした上で、新見南吉の『手袋を買いに』の母狐の言葉の持つ意味について説明を試みている。トドロフのような日常的美徳の行動を遠い他者にまで広げることが可能にしてくれる、より豊かな想像力と日常的美徳をも超えた美徳の育成という課題を絶えず持ち続けることに、「異文化コミュニケーション教育」の「教育」としての希望が存在することは確かである。同時に、異人排除が存在する社会において、いまだ実現し得たことのない「異なる者との共生」が可能となった理想の社会を不安の中で希求し続けていかなければならないという厳然たる現実がある。現実世界は、偶然性を排除できず、理不尽かつ極めて暴力的な出来事に満ちており、その時点では私達は理解不可能の状態におかれる。一方、優れた虚構の物語は、「現実」を反映して、そのために「現実的」だと感じさせ、読者に真実とは何かを問わせ、物語の登場人物に、そしてひいては、自分に別の選択肢があるのかを考えさせることができる。『手袋を買いに』で最後に2度繰り返される母狐の言葉に表象される「揺らぎ」の瞬間を「異なる者」との出会いにおいて私達も何度も重ねるしかなく、その「揺らぎ」ゆえに起こる様々な感情を真摯に受け止めていく過程が「異なる者との共生」へ繋がる一步になるのではないだろうか。そう思わせてくれるゆえに、母狐の言葉は「現実的な」希望であり、『手袋を買いに』は「現実世界」において私達に希望を与えるという点において「現実的な」虚構の物語となる。

はじめに

最初に、『フィクションとは何か』¹⁾を基に、「読者にとっての虚構の物語」の持つ意味について考えてみたい。物語は感情的には私達を内側に引き込むものであり、読者は物語の内側に入る、つまり、感情移入をする。私達は虚構世界を外側から観察するのではなく、自身が虚構世界の中に入り込み、そこの住人となり、登場人物と多様な感情を共有する。時には、正の感情である喜びや幸せを共有して、一緒に歓喜し、賛美をし、時には、負の感情を共有して、共に悲嘆にくれたり、嫌悪したり、というように、その世界で生きるのである²⁾。物語は、出来事について多くの在り方を現実的に感じさせながら示し得るものである。経験もしなかった現実の出来事より、置き換え可能で組み合わせも自由なA、B、Cでもって、より多くの出来事を私達は感情のレベルで理解できるのである。その上で、現実世界の経験と異なり、虚構世界の物語を読者は繰り返し鑑賞でき、往々にして、同じ物語に繰り返し接しても物語の読者に対する力が弱められないという利点がある³⁾。何度繰り返しても同じ強さの感情の同一化を経験させ得る物語の力は大きい。時には繰り返して物語に感情移入をし、広がり、豊かになった読者自身の経験は、必然的に他者理解や自己理解に繋がることになる。

異文化コミュニケーション教育において、異なる者との関係性を示してくれる物語の役割は大きい。そして、日本の秀逸な短編童話の中には、異文化コミュニケーション教育の場において提示したいものがいくつもある。短編であるがゆえに、英訳をされて世界の幅広い世代の人に読んでもらえる可能性も大きくなる。新見南吉の優れた短編作品、『手袋を買いに』もそうした物語の一つである。本稿では、現実と多文化主義の限界、日常的美徳と異人、狐と人間の関係、新見南吉の狐の物語、『手袋を買いに』の英訳、の5項目にわたって論じることで、『手袋を買いに』における物語の最後の母狐の言葉が「異文化コミュニケーション教育」にとってどの

1) ウォルトン、ケンダル 田村均 (訳) 『フィクションとは何か』 名古屋大学出版会、2016.

2) ウォルトン、p.275.

3) ウォルトン、p.264.

ような意味を持つのかについて説明を試みている⁴⁾。また、その過程において、異文化コミュニケーション教育での「異なる者との共生」についての考えを明確にできたらと考えている。

1. 現実と多文化主義の限界

異文化コミュニケーション教育において「異なる者との共生」をどのように考えるべきかと問う時、過去から現在にいたる長い歴史で、理想といえる社会は一度もなかった事実を無視することはできないだろう。絶えることのない戦争、ジェノサイド、そして民主的で平和とされる国でも、差別や偏見は存在する。ライブニッツが言い切ったように、この社会が可視的社会の中で最善であるとは誰も言えない。一時期魔法の言葉のように持てはやされた多文化主義のイデオロギー自体に否という者はいないだろうが、同時に、「多文化主義の社会こそが目指す社会である」という単純化した言葉には問題があることも明白である。異なる文化に属する者が、他の集団からの偏見を免れ、平等に存在し、自由が保障された中で、一つの共同体で生きたことがある、とは誰も言えないからである。そうであるなら、多文化主義の社会が理想であるとは言えないはずだ。私達は、いまだ「理想的な多文化社会」なるものを持っていない、目指すべき社会をいまだ見ていない、という事実を、異文化コミュニケーション教育では真摯に受け止める必要がある。

「文化と文化の関係というのは『異文化理解』とか『異文化コミュニケーション』といった人畜無害な表現がイメージさせるところとは異なって、生き残りをかけた抗争なのである⁵⁾」という言説が説得力を持つのも、文化の多元的共存は、「エスニックレストランのメニュー」のように料理の数が多くなって増えていく程にぎやかでよいといった類のものではなく、場の共有が即、力関係-マジョリティ対マイノリティーという形の葛藤する関係になるからである。結局、差異を理解することは、自分や自分が属する共同体を脅かさない状態では、難しいものではない。し

⁴⁾ 本稿の1節と2節は、『異文化コミュニケーション教育におけるヒーロー』（青木順子、大学教育出版、2001、6〜7章）から一部転載している。

⁵⁾ 藤野寛「多元文化主義・同化ユダヤ人問題・非同一的なもの」『現代思想』Vol.24-3、青土社、1996、p.202.

かし、いったん理解したと思う差異も、それが脅威に感じられる時、本当に受容などしていなかったことに気づかされる。理解とは、他者性を相手に認めつつ、自己の動揺を伴うものなのである。心地よい「異文化理解」も、安全なところに自分において、自身は何の変革をすることもなく成し遂げたような気がする限り、いったん社会状況が変わり、理解したはずの他者の論理が自分を脅かすと感じた時には全く無力であることは、隣人であった他民族を容赦なく殺戮していった多文化社会の悲劇が示すとおりである。明るい人間関係を築かせる響きを持ち、耳に快い「異文化コミュニケーション」であるが、自分のアイデンティティが脅かされない状況であれば、「異文化コミュニケーション」をすること自体は易しいことだ。差異を持つ者と真の対話をしないで、表面的に済ませる方法など無数にある。しかし、そうした他者性を見つめて自分への働きかけを受け入れていないコミュニケーションなど、文化の葛藤の中ですぐに成り立たなくなり、私達はコミュニケーションの回路さえ平気で中断してしまうだろう。さらに言えば、偏見のコミュニケーションを取ることで、十分「異文化コミュニケーション」を成り立たせることだって可能なのであり、それを多くの人々がしてきたのだ。民族ナショナリズムを唱え自民族のみの国家を求める声の一部の狂信者からだけとは言えないような状況は絶えることなく歴史に存在してきたのである。

世界中がコロナ禍一色になる異常な状況にあった 2020 年にあって、世界的規模に広がった BLM 運動は、そうした人種差別を根絶して共生の社会を作りだすために多文化主義の考えが生まれた 1960 年代の公民権運動の時代から半世紀を経ても、同じように人種差別に苦しみ憤る人々が多く存在していることを世界に再認識させたといえる。当時、同じように人間的尊厳の平等を信じながら、マジョリティグループによってではあるが、時には正反対の位置に置かれ、実現へのアプローチが対比され続けた二人のヒーローがいた。その一人、キング牧師は、「人種差別という巨大な社会悪を前にして、非暴力の抵抗という、一見力のなさそうな手段で戦いを挑んだ人物。しかしその精神的な内容の高さゆえに、結果的には勝利をつかんだ男。そしてその業績ゆえに今まで語りつがれている英雄⁶⁾」と形容されるような、

⁶⁾ 松尾式之『アメリカン・ヒーロー』講談社、1993、p.139.

何人も否定しないであろう公民権運動のリーダーと称されたヒーローである。一方、もう一人のマルコム X は、キング牧師と対極におかれるアプローチ、例えば、「この時代の若者たちは何を望み、何を手にするために、必要なあらゆる手段をとってその意志をつらぬく用意がある⁷⁾」、「黒人に犯したすべての暴力を考えれば、黒人に非暴力であることを期待することは犯罪である⁸⁾」等の発言にも関わらず、同じ黒人の間でヒーロー化された人物である。結局、キング牧師とマルコム X を対立した形で単純化して捉えること自体が、社会的に優位に立つ白人のメディアのとらえ方であり、実際は違った角度から同じ目的のために戦っていたのだという指摘もある⁹⁾。人種的正義こそが両者が得ようとしていたことであり、アメリカ黒人の抱える問題の複雑さや彼らの運動の意義を理解しないで、二人を対立項に置くのは間違いで、むしろ人種的正義の実現のために両者の在り方が一緒に必要だったということである。ここから見えてくるのも、社会が問題を多く抱えるほど、様々なアプローチへの議論が生まれるという事実である。そして、様々なアプローチが生まれ得ることに、私達は問題がいかに根深く複雑であるのかを知らされるというわけだ。

実際に、非暴力運動のリーダーであるキング牧師も、北部のスラムで黒人の置かれている状況が南部とは異なることを見ていく中で、マルコム X の分離主義もやむを得ないと考え始めたと言われている¹⁰⁾。また、ブラック・パワー以後は、キング牧師は、規範とすべき人物像として白人に言及することが少なくなり、黒人の名を挙げ始め、かつては重要ではないとコメントしていたイエスの肌の色について、「イエスは白人ではなかった」というコメントさえもするに至ったというように¹¹⁾、社会問題が複雑である時には、それを改革しようとするアプローチの訂正を余儀なくされることもある。1992年の警官による黒人への暴行に端を発したロサンジェルス暴動の翌年、映画『マルコム X』が公開される。その中で監督のスパイク・リーは

7) ブレイトマン, J., 長田衡 (訳) 『マルコム X・スピークス』第3書簡, 1993, p.70.

8) ドクター, B.A., 阿木幸夫 (訳) 『マルコム X』現代書館, 1993, p.75.

9) コーン, J.H., 梶原寿 (訳) 『夢か悪夢か・キング牧師とマルコム X』日本基督教団出版局, 1996, p.371.

10) コーン, p.319.

11) コーン, p.319.

明らかにマルコム X をヒーローとして表象していた。公民権運動から 30 年以上経ても目指されていた理想からほど遠い社会状況では、キング牧師のアプローチを信じられないという者が少なからず当時存在していたと考えられる。そして、それからまた 30 年近く経った 2020 年の BLM 運動の報道が示すように、黒人差別の問題は「同じように」存在しているのだ。2023 年、8 月 26 日、キング牧師のワシントン大行進 60 周年の記念行事で、キング牧師の長男は、「この国は前進せずに後退している気がする」と演説で懸念を表明したという¹²⁾。

BLM 運動の報道時にはコロナ禍の影響で米国でのアジア人へのヘイトクライムが激増との報道も続いた。異なる者と見なした者との共存の困難さは、そうした異なる者との平和な世界観が高らかに謳われるスポーツの大祭典の開催においても明らかだった。2022 年 2 月開催された北京冬季オリンピック開催における、ウイグル自治区でのジェノサイド疑惑とボイコットを求める抗議活動、アジア系米国人の活躍に関連して報道されたアジア系米国人の複雑な立場や差別体験¹³⁾、米国黒人スピードスケーター初のメダル獲得で再認識された差別の歴史。そして、オリンピックの開催中に危惧され閉会後すぐに始まったロシアのウクライナ侵略では、文化的な共通点を多く持つ隣国の人々に行使された残虐な行為が世界の人々を震撼させ

12) 「白人警官による黒人への暴力行為が相次ぎ、共和党のトランプ前政権下で保守化した連邦最高裁が大学入学選考で黒人らを優遇する積極的差別是正措置（アファーマティブ・アクション）を違憲と判断するなど逆風も吹いている。」（「キング牧師演説から 60 年で行事人種間融和の『夢』道半ば」東京新聞、2023 年 8 月 27 日）

13) 「チェン選手と、もう 1 人の中国系米国人ピンセント・ゾウ選手への不満の声が多く寄せられた。彼らが 10 月の記者会見の場で、中国の人権問題に関するチームメートの批判的発言をそれとなく支持し、中国を侮辱したというのがその理由だった。中国系米国人はかつて文化的なアンバサダーとみなされ、違った歴史観や世界観の橋渡しになる存在だった。だが、今は忠誠心をめぐる問題を突き付けられている。」、「米国で生まれ育ちトレーニングをしながら北京五輪では中国代表となることを決めたフリースタイルスキーの谷愛凌選手について、チェン氏やゾウ氏をめぐる状況とは対照的な存在となる可能性がある」と指摘した。谷選手は以前のインタビューで、自身の選択に対し、多数の厳しい批判があり、中には殺人の脅迫も含まれていたことを明らかにしている。」（「北京五輪、中国系米国人選手の恩恵は重荷にも」ウォール・ストリート・ジャーナル日本版、2 月 9 日、2023 年）「谷は、米国サンフランシスコで生まれ育ったアメリカ人でありながら、母親の母国である中国のために競技をするという決断をした。米中対立を背景に、その決断がアメリカの一部では批判の対象になっている。」（「米国連大使が、五輪の中国代表になったアイリーン・グー（谷愛凌）の欺瞞を批判」ニューズウィーク、2 月 16 日、2023 年。）

たのである。いまだ実現していない社会を目標に、理想とかけ離れた出来事が勃発する世界で、理想の実現を目指して教育していく困難を抱えている現実においては、場合によっては殺害という極端な方法で他者の排除を許してしまうような偏見やステレオタイプの問題が、決して不幸な偶然の産物としてではなく、私達の社会の抱えるコミュニケーションの問題の中心にある、と結論することは、残念ではあるが正しいように思える。

2. 「日常的美德」と異人

こうした現実を前に教育者が目指せることは、どんな社会が避けられるべき社会なのかという問いに導かれ、消去法を駆使していくことになるだろう。人間の本性と過去の歴史を学ぶ中で、どんな社会が望ましくないのか、という問いに丁寧に答えていくことが、こうした教育に携わる者が取っていくべきアプローチではないだろうか。理想の社会の実現が少なくとも人類の歴史を見る限り不可能に近いのではという怖れを持ち、その苦い記憶を保持した状態で、ともかく最悪の事態を極力避け、今何ができるのかを思考し、そのように考える自分もいかに真の対話ができていないか、という自らの痛みである事実に戻るのである。「異なるカテゴリーに属する人々の文化を理解することで素晴らしい異文化コミュニケーションへの道が開ける」という宣伝文句のような言葉の浅さを、実現の不可能性に対する不安の中で希望しているという事実を認めることで受け入れるのである。当然、必然的に起こる苦痛を引き受けて行動することが、その不安とともに希望する態度に含まれるものでなくてはいけない。そして、過去の数えきれないできた文化の課す様々な重い課題の中で、理想的なコミュニケーションの名のもとに、再び課題を超えることを目指すという約束、人類としてのアイデンティティというカテゴリーに立てなかったために起こった過去の記憶を忘れずに真摯に証言する約束、そうした約束自体を忘れないという約束—こうした約束性もそこにはなくてははいけないのである。

同時に、こういう社会が望ましくないのだということを明確にした後でさえ、私達の過去の歴史や社会の現実を踏まえるなら、これこそがそれを避けるための最善のアプローチだ、最善の教育だというのは難しいことを認めなくてははいけない。教

育や社会を変える運動も、社会的現実に応答しなければ意味がない。純粹に良き意図からなる教育や運動からでさえ、生じてくだろう成果をただ待っているという態度は誠実ではないだろう。多文化主義社会が最善だという信念で施行された法によって自由や平等を奪われていると感じる人々がいるとしたら、最善の社会は存在しないという問題をも含めて、多文化主義や多文化教育が様々な論議を生んできたように、異文化コミュニケーション教育も、絶えずその問題点を議論していく必要があることを忘れてはいけないのである。そして、「差異を前提にした共生」を謳う教育が施行されても、現実の「差異」による不平等が存在する社会にあって、「差異」ある他者の、その他者性を見つめた上でコミュニケーションができる者が本当に育つのかは未証明のままであることを常に念頭にしなければならない、ということも確かなのである。そうした認識を持った上で、ともかく、日常生活において正義を基盤に人間の尊厳の尊重ができる、その延長上には「異人」と社会で見なされてしまった者との関わりにおいても「他者性」に真摯に向き合える、そうした人間を社会で一人でも増やしていくような教育が望まれるのであろう。

「他者性」に向き合い尊重をするような生き方が英雄的であることを要求するわけではない。「英雄的美徳」と「日常的美徳」の異なりをトドロフは以下の様に説明している¹⁴⁾。「英雄的美徳」には、理想への忠誠が存在し、英雄はまさに「理想のために仕える権力の具現者」である。「日常的美徳」では、尊厳が第一にあり、個人は意志を備えた主体としてある限り、尊厳を備え、死でさえも尊厳を侵すことはない。死を前にしてチェコの国歌やユダヤ人の歌ハチクヴァを歌い出した「家族収容所」の受刑者達、収容所で与えられる死の前に、自らの手で死んだ者が、そうした尊厳を表している。気遣い、他者への気遣い、自分だけのためならとてもし得ないだろう行動を他者のために行うことが「日常的美徳」である。行為の受け手としての特定の個人が存在する。トドロフの挙げた人々 — ユダヤ人の護送列車に乗り込む母親を追いかけ、母親と一緒に、決して出発点に戻ってくることがない列車に乗り込んだ娘、ただともに死を迎えるために、選別されたユダヤ人の夫とともにソビホルへ行ったオランダ人の夫人、ナチスに見つかってしまい死を宣告さ

14) トドロフ, T. 宇京頼三 (訳)『極限に面して』法政大学出版局, 1992, p.134.

れた息子を一人では行かさないように火葬場とともに向かった母親、のように、彼等、彼女達の行為は他の人に向かう。このような極限状態に置かれた時、人は同じ日常的美徳による気遣いから、愛する相手の命を奪うというぎりぎりの選択を迫られるかもしれない。ちょうど、ガス室へ送られる前に自分の弟を殺した男のように、である。しかし、自分が愛する者という特定の個人に向かう日常的美徳の気遣いは、必ずしも全ての人々に同等に向かうということはないのである。トドロフが言うように、

気遣いは根絶し難い人間感情で、親や子、恋人や妻、仲間や友をもつ者を安心させる。しかし、誰も知らない者、異邦人は誰が助けるのか？——すなわちこの2者は同じことだが、別の状況にある者たちのことであり、我々はみな潜在的には、異邦人、見捨てられた無名者なのだから。彼らには、彼らを愛する者の気遣いだけでは不十分なのである。¹⁵⁾

自分の行為が、たとえ英雄的行為であるにしろ、報われることを期待しない人々、表立って英雄として表象されることはないが、かといって当たり前のように見出されるありふれた行為者であるわけでもない。他ならぬ自分が直面した出来事を前に、誠実に応答しようとした人々、例えば、危険を侵して数人のユダヤ人を自分の家に匿った女性、恐ろしい収容所の経験の後でも、個人の責任を集団へ押し付けない人々、こうした単純な英雄的美徳と日常的美徳では分類しきれない「数少ない」人々をトドロフはこのようにいう。

日常的美徳はどこにでもある。これを声高くして言い、また喜びとせねばならない。しかし、社会生活でも、個人生活でも、これが不十分であることが分かる時がある。困苦と悲嘆の時である。こうした時期には、より大きな美徳が必要となる。その時、主体はたんに自らが定めた行動を自ら引き受けるだけでなく彼自身の生命や財産のためにも、近親のもののためにも危険を受け入れるべきである。またたんに、その行為を個人に向けるだけでなく、この個人が近親ではなく、未知の者であることも受け入れるべきである。要するに、その時、勇気と寛大さが等しく必要不可欠となる。¹⁶⁾

そうした「数少ない人」の存在を示す例はいくつもある。エルサレムの郊外の丘に、ホロコーストの犠牲者と、彼等に救助の手を差し伸べた人々を記念するヤド・

¹⁵⁾ トドロフ、p.106.

¹⁶⁾ トドロフ、p.351.

ヴァシエムという博物館があり、そこへ通じる道に並木通り、「正義の人々の通り」がある¹⁷⁾。一本一本が、ナチ時代にユダヤ人を救うために自己の生命の危険を冒した非ユダヤ人を記念して植えられており、そこに入るためには厳格な審査が必要であるにもかかわらず、植える必要のあるとされた記念樹をまだ植え切れないでいる¹⁸⁾。その数 6 千本は、先に述べた「数少ない人々」の存在の証なのである。6 千本という数が多いか少ないかはおいておいても、この数が増えていくことは希望を証明してくれる。

同じくナチ時代に、アウシュビッツを生き延びて、『これが人間だとしたら』を書いたプリモ・レヴィは、非ユダヤ人のロレンツォが、6 か月間毎日、自分の配給の残りと一緒にパンを彼に持って来てくれたと記している。ここにも「数少ない人々」の存在の証が、希望の一筋の光が、静かに輝いている。

私は、自分が今日生きているのは本当にロレンツォのおかげであつたと確信している。そしてそれは、彼の物質的な援助のおかげであるふりも、彼という人がいることによって、また自然に、かつ飾り気なしに善良であることによって、私たち自身の世界の外部になお正義の世界が存在しており、今なお純粋かつ完全で、墮落せず、野蛮でなく、憎悪や恐怖とは無縁な何かや誰かが存在しているのだということを、彼が絶えず私に思い起させてくれたおかげであつた。それは何か定義しがたいことであり、善のはるかな可能性であつたが、しかし生きのびることもそのためにこそ価値があつたのである。¹⁹⁾

そうした人々は、キング牧師が生前によく語っていた「知られざる地上整備員」にも通じる²⁰⁾。彼を支える多くの支持者を航空機の飛行準備をする無名の労働者に例えることによって感謝し、彼が今こうしたあるのも、新聞の見出しを飾ることなく、誰と知られることもない人々が、公民権運動に参加してくれたおかげであると称えた。キング牧師は運動のシンボルとなったが、このような支持者達が「義のために喜んで苦しむ」ことなしにはその運動はあり得なかつたのである。彼等が、トドロフのいう日常的美徳によるのでもなく、英雄的美徳によるのでもない行為者であつたと言えよう。そして、このような「数少ない人々」が増えていく社会こそが、

17) シンガー、P. 山内友三郎（監訳）『私たちはどう生きるべきか』法律文化社、1995、p.232.

18) シンガー、p.232.

19) シンガー、p.240.

20) コーン、p.131.

私達の求めていくべき社会ではないだろうか。

人種差別と闘ったヒーロー、ネルソン・マンデラも、自伝の中で、誠実で強靱な民衆を称えている。

闘争のすばらしい同志たちから、わたしは勇気の意味を学んだ。わたしは、理想のために自分の身を危険にさらし、命を投げ出す男女を何人も見てきた。襲撃や拷問にもひるまず、計り知れない強さと抵抗力を示す人々を、何人も見てきた。勇気とは、こわさを知らないことではなく、こわさに打ち勝つことだと、わたしは知った。わたし自身、思いつけないほどの数の数の恐怖感を味わい、それを豪胆という仮面で隠してきた。勇者とは、何もおそれない人間ではなく、おそれを克服する人間のことなのだ。私はこの偉大な変革が成し遂げられるという望みを、一度も捨てなかった。すでに名をあげた英雄たちだけでなく、この国のふつうの男たち、女たちの勇気を信じていたからだ。²¹⁾

こうした勇気ある「ふつうの男たち、女たち」こそが、トドロフが「数少ない」と形容し、キング牧師が「地上の整備隊員」と言ったものになり得るのであり、英雄的美德を称えられるようなことは一度もなく、日常的美徳を広げることのできる勇気と寛大さを異人にも示すのである。

アレントは、労働が英雄的行為となる時と、苦痛とも言える反復を必要とする時とを以下のように比較している。

自然的過程に逆らって世界を保護し保存することは、労苦の種で、このために、単調な雑事を日々繰り返さなければならないのである。(中略) 昔話や神話物語の中では、この闘いは、しばしば、圧倒的な強者にたいする壮大な英雄的闘争として描かれている。たとえば、ヘラクレスの話がそうである。彼が行ったアウゲイアスの馬小屋の掃除は、12の英雄的「労働」の一つである。ここには、大きな力と勇気を必要とし、闘争精神をもって行われる英雄的行為という意味が含まれている。(中略) しかし、実際をいうと、人間の肉体が世界を清潔にし、その衰退を防ぐために従事する日々の闘いには、英雄的行為に似たところはほとんどない。昨日の荒廃を毎日新しく修理するのに必要な忍耐というものは、勇気ではなく、またこの努力が苦痛に満ちているのは、それが危険であるからではなく、むしろ、それが情け容赦なく反復しなければならないものだからである。ヘラクレスの「労働」は、それが一度限りのものであるからこそ、すべての偉業と並び称されるのである。しかし、不幸なことに、一度だけ努力がなされ、課題が達成されれば、以後ずっと清潔を保っていられるのは、ただ神話上のアウゲイアスの馬小屋だけである。²²⁾

21) マンデラ, N. 安藤龍男 (訳) 『自由への長い道——ネルソン・マンデラ自伝 (下)』日本放送協会, 1996, p.446.

22) アレント, H. 志水速雄 (訳) 『人間の条件』 筑摩書房, 1994, p.156.

反復にしかすぎない日々の労働を淡々とこなし、その行為に勇氣と寛容さを当り前のように示して生きる者の増えていく社会を私達は必要としているのである。なぜなら、地球は、アレントの言うように、単なる神話上のアウゲイアスの馬小屋ではなく、多くの人々による永遠の努力を必要とするからである。

3. 「狐」という異人の存在

日本文化において狐は興味深い存在である。人間にいったん捕まればただの弱い小動物に過ぎない一方、同じ狐が同時に「人を化かす」賢さや人が持っていないような特殊な能力を持っていると信じられている。『異界と日本人』において、小松は、狐は実在の動物であるが、日本人は神秘的なイメージを抱いてきて、人により移って病気にする、死にいたらしめるというものから、「お稲荷さん」として五穀豊穡、立身出世、商売繁盛をかなえてくれるというように、「人間の制御の外側にいる、人間に敵対する妖怪としての狐」と、「人間に制御された友好的な関係にある神としての狐」の二つに分類できるという²³⁾。妖怪狐の伝承では、川藻や水藻などの藻を頭に載せる、木の葉や馬沓を頭に載せる、頭には何も載せないが、川で顔を洗う、水音を鏡として化ける、宙返りをして化ける、玉や巻物を口にくわえるといったように、多彩な「化ける」方法を狐は持っている²⁴⁾。

さらに、小松は、そうした狐など妖怪となるものの存在は、人間社会に大きな役割をもっていたと指摘する。人間社会は、それ自体で完結していたわけではなく、「異界」との相互関係によって成り立っていると考えられており、妖怪は人間の文化の発展を妨げる「迷信」として理解される側面とともに、人間の果てしない欲望を制御する「道徳」としての役割をもっていたのである²⁵⁾。つまり「異界の解体・消滅は人間のそうした道徳によって制御されてきた欲望の解放」の役割を担っていたのである²⁶⁾。

また、小松は、妖怪は「人間の恐怖心が生み出した幻想」と説明し、人間が安住

²³⁾ 小松和彦 『異界と日本人』 KADOKAWA, 2015 年, p.48

²⁴⁾ 小松, p.149.

²⁵⁾ 小松, p.201.

²⁶⁾ 小松, p.201.

している秩序を破壊する恐怖から生まれてくるために、その秩序が破壊されたり歪められたりすると感じられた時に妖怪が現れるという²⁷⁾。妖怪を見ることで人間が何を恐れているかが浮かび上がってくることになり、自然、道具、人間、そして自分自身、に対する恐れが複雑に絡まりあって、妖怪が幻想される²⁸⁾。人間の側の抱えている矛盾や罪悪感が妖怪を生んでいるのである。人間が正義の側で、妖怪が悪の側という単純な図式が成り立たないのも、その妖怪が、人間社会の悪の部分、闇といえる部分を反映しているからである。

異界や妖怪の物語が興味深いのは、そうした恐怖の形象を通じて、排除する側がつねに「正義」であり、排除される側が「悪」なのだという単純な構図ではなく、妖怪出現の原因が人間社会の矛盾や個人の不正と思える事柄をも浮かび上がらせていることである。つまり、社会の抱えているコンプレックスや罪悪感が、妖怪を呼び招いているともいえる。妖怪はそうした人間の「闇」に棲みつくのである。²⁹⁾

上述の説明に基づくならば、狐も単なる2面性を持つ動物という存在ではなく、人間の持つコンプレックス、罪悪感、人間社会の矛盾といった人間が抱える闇を反映する存在であり、それゆえに、人間と狐は正義と悪という単純な対比できるような関係性は持っていないといえる。

こうした日本文化における狐の特殊な存在を前提にして、「異人」の存在として人里離れた森に住んでいる狐と村や町に住む人間の両者の関係を基にした物語が語られることがある。例えば、日本を代表する児童文学の作家の一人、新見南吉は、そうした「狐」をいくつもの物語に書いている。

4. 新見南吉の「狐の物語」

本節では、新見南吉の「狐と人間」が主たるものとして登場する物語から最も知られている作品の一つ、『手袋を買いに』³⁰⁾を見ていきたい。『手袋を買いに』は、手が凍えた子狐のために手袋を買ってやりたい母狐が子狐をつれて町まで行くこ

²⁷⁾ 小松, pp.201-202.

²⁸⁾ 小松, pp.201-202.

²⁹⁾ 小松, p.202.

³⁰⁾ 本稿では3作からの引用は、全て以下からである。新見南吉 『新見南吉童話集』角川春樹事務所, 2006. 頁の記載は省略している。

とから始まる。初めて見る雪に目がまばゆい思いをする子狐は、人間と遭遇さえしたこともない。一方母狐は、過去の怖い経験から人間の町に足を踏み入れることもできない。彼女の人間との遭遇は、こう語られる。

「あれはお星さまじゃないのよ。」といって、そのとき母さん狐の足はすくんでしまいました。「あれは町の灯なんだよ。」その町の灯をみたとき、母さん狐は、あるとき町へお友だちと出かけていって、とんだめにあったことを思い出しました。

その「とんだめ」は、人間から見れば盗人に対する対応である。大事な家鴨を盗もうとする狐は、人間にとって悪賢く油断がならない。

お百姓にみつかつて、さんざん追いまくられて、命からがらにげたことでした。

一方、狐の側は命をかけた逃走となり、その時の恐怖はすさまじいもので、それは母狐には強いトラウマとなり、かわいい子狐の手袋を買うためとしても、「母さん狐はどうしても足がすすまないのでした」。

母狐は、子狐の手を「かわいい人間の子どもの手」に変える。そして、お金を持たせ、その手だけを見せることで手袋を得るように教えて、町はずれで子狐の帰りを待つことになる。人間について、母狐は何度も警告を与える。

「人間はね、相手が狐だとわかると、手袋を売ってくれないんだよ。それどころか、つかまえて檻の中にいれちゃうんだよ。人間ってほんとにこわいものなんだよ。」

狐は猟師に怯えて暮らし、母親が経験したように人間に命を奪われるような弱い存在で非力である一方、人間の方は狐に騙されることもあり用心をする必要がある、正体が分からないもの、だからこそ怖いのだ。そして、異人であるがゆえに、大多数の側が銃を平気で向けることができるとする存在なのだ。疑いもなく消滅させられる存在なのだ。狐というだけで酷い目に合わす残酷な人間が、母狐の理解している人間である。

帽子屋で子狐は間違えて手を出してしまうが、本当の貨幣を差し出したのを見て、騙そうとはしていないことを分かった店主は、何も言わずに子狐にぴったりの手袋を渡して、そのまま行かせる。母狐の話とは違った人間に遭遇した子狐は、帰り道に人間についてこう考える。

「お母さんは、人間はおそろしいものだっておっしゃたがちっともおそろしくないや。だってぼくの手をみてもどうもしなかったもの。」と思いました。

人間はどんなものだろうと好奇心が高まった子狐は、窓の下で、人間の美しい優しい子守歌をうたう声を聞く。子狐は、母狐が同じように歌ってくれるのを思い出して、人間のお母さんだと考える。続けて、その人間の親子が話す森の狐の親子の話が聞こえてくる。子狐は母恋しさに飛んで帰る。一方母狐は、怖い人間の間から帰ってくる子狐を今か今かと待っている。

心配しながら、坊やの狐の帰ってくるのを、いまいまいかとふるえながら待っていましたので、坊やがくると、暖かい胸にだきしめてなきたいほどよろこびます。

子狐は、母狐とともに森に帰りながら、自分のおかした間違いを話す。

「母ちゃん、人間ってちっともこわくないや。」

「どうして？」

「坊、まちがえてほんとうのお手々だしちゃったの。でも帽子屋さん、つかまえやしなかったもの。ちゃんとこんないい暖かい手袋くれたもの」といって手袋のはまった両手をパンパンやってみせました。

思いがけない話に驚いている母狐の独白で物語は終わる。

「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら」とつぶやきました。

『手袋を買いに』における人間と狐の関係性について主たる特徴を記してみよう。一つは、狐という他の動物とは異なる存在と人間の関係性が物語の前提にあることである。前節で説明をしたように日本文化における人間に対する狐の特殊な存在から、人間と動物の間におきた単純明快な物語としてではなく、両者の複雑な関係が反映される物語となっている。人間による鉄砲の一発で殺されてしまうような非力な動物だけれど、一方で、狐は賢くて、「化かす」という人間が怖がるような能力を持ったものとしても存在している。まさに、人間が無意識に怖がっている闇を具現したものとしての存在でもある狐は、人間社会にとって、簡単には扱うことができない「異人」なのである。そして、狐にとっても、人間は力行使する完全なる他

者性を保持して存在する。二つ目には、狐の日常的美德、時にはそれを超えた美德の存在である。『手袋を買いに』の凍えた手をした子狐を不憫に思い街まで連れていき、トラウマのため足が動かないがゆえに、胸を震わせながら帰りをずっと待ち続けている母狐。気遣う行為の受け手として特定の個人がいる狐が存在する。三つ目は、人間と狐を「同じような関係性と感情を持つ存在」として類似の関係性と感情を並列して示していることである。眠りにつく子に歌を歌って聞かせる人間の母と同じように眠りにつく狐の子に歌う母狐—これらは、異人は人間と同じような関係を持ち、同じような感情を持つ生き物なのだと強く感じさせることになる。4つ目は、「狐の死」が描かれていることである。『手袋を買いに』では、母狐は「いのちからがら」逃げ出した、見つければ「檻の中」で死にいたるのであるう子狐の安全な帰還を不安とともに待つ、というように、「狐の死」の暗示がある。そして5つ目は、人間側からの狐に向けた日常的美德の広がりといえるような描写があることである。狐だと分かったが帽子屋はぴったりとあう手袋を渡し、そのまま行かせる、人間の母子が森の狐の母子について優しく語る、である。それが『手袋を買いに』は暗示されてはいる「死」のもたらす暗さをほとんど感じさせない理由でもあり、終始子狐の視点に立って物語を体験している読者を穏やかな気持ちにさせる。

5. 母狐の言葉と英訳

『手袋を買いに』は、前節で述べたように、暗示されていても「死」のもたらす暗さは抑えられ、帽子屋や人間の母子といった人間側からの狐に向けて境界を越えて与えられる日常的美德で読者を安心させる物語である。この物語を、理想的な「異なる者との共生」は一度も可能になっていないように見える世界において「異なる者との共生」について考えさせてくれる物語と筆者は考えて久しい。主たる理由は、最後の母狐の言葉にある。本節では、『手袋を買いに』の最後の母狐の言葉の英訳を取り上げることで説明をしてみたい。原作での母狐の言葉は、読者にいくつかの異なる解釈を許してしまう曖昧な日本語といえる。当然、この日本語表現の解釈として許される範囲内であれば、読者が様々な解釈をしたとしてもおかしくはないし、その点では読者にあずけられたといえる解釈なのである。それゆえに、どのように

解釈するのか、したいのかと問う時、異人との関係をどのように生きることができているのか、思いたいのかという個々の考えが必然的に反映されてしまうような言葉といえよう。そして、この最後の言葉の曖昧さこそ、作家の伝えたい思いを示しているのではと筆者は考えている。以下、説明をしていきたい。

英訳は、各訳者の解釈、すなわち考えが英語にそのまま反映されることになるという点で、とても興味深い。現時点で筆者の手に入る3冊の英訳本の該当箇所の英訳を見てみよう。まず最初に、原文を提示しておく。なお、英訳本の中には、原作も日本語で入っており、日本語の漢字表記等が、原作の日本語から変更されている箇所もある。

(原作の日本語)

お母さんぎつねは、「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに 人間はいいものかしら。」と、つぶやきました。

① *Buying Mittens* (YellowBirdProject)³¹⁾

The mother fox shouted. “Oh my goodness!” She was shocked. But she was muttering”
Are humans really okay? Are humans really okay…? “

② *Buying Mitten* (バベルプレス)³²⁾

“Oh my!” replied his mother, then thought out loud. “Maybe humans really are good. Maybe they are good after all.”

③ *Buying Mittens* (University of Hawai’i Press)³³⁾

Then she looked at him and murmured: “People really must be good. People really must be good!”

3つの訳の違いには、各訳者がどのように母親の言葉を解釈したかが反映されている。3つの中では、①が、明らかに、人間が善きものであることについて最も懷疑

³¹⁾ Niimi, Nankichi, Eriko Okada (訳) “Buying Mittens” YellowBirdProject, 2015.

³²⁾ 新見南吉, マンディー・ハースイ (訳) 『てぶくろをかいに: Buying Mittens』バベルプレス, 2018.

³³⁾ Niimi, Nankichi, Judith Carol Huffman (訳) “Buying Mittens” University of Hawai’i Press, 1998.

的であるといえる。母狐がそれまでに知っている人間は善ではなかったわけであるから、子狐の話に母狐は驚き、動揺もし、「本当にそうなのだろうか」と2度同じ問いを繰り返すのである。ただし、最初は疑問符がつき、2文目ではそれが「…」となり、気持ちにかすかな変化がみられる。②では、2文目では“after all”が加えられ、人間の善であることを信じ始めて、母狐がそれまで持っていた人間への懷疑を打ち消す方向に向かっていることが示されている。③では、母狐は人間の善なることを「違いない」と2度繰り返して少なくとも自身には人間の善を確信したものとして言い聞かせている。そして、これら3つの英訳はいずれも原作の日本語の英訳として十分認められる「正しい英訳」の範疇にある。

もし「異文化コミュニケーション教育」においてどのように解釈すべきなのかという観点で選ぶならば、どれになるのだろうか。本稿の前半で述べてきたような現実の社会に近いという点で見ると、①なのかもしれない。人間は、狐を捕まえて狐を捕まえる。まさに死さえもたらす恐ろしい迫害者なのである。そうした関係性ゆえに、母狐の「人間は怖いもの」という思いを簡単に変えるのは難しいであろう。トラウマを持って町に足を踏み入ることもできないほど強かった人間に対する恐怖心は、たった一つの出来事で打ち消せるような生易しいものではないはずだ。結局、狐にとって善い人間に会うのは稀だろう。狩猟で生計を立てる猟師は見つけた狐をすぐ殺すだろう。家畜を守る必要のある農家は、盗人の狐を追い払うだけでなく、確実に捕らえて殺してしまうだろう。ただ、母狐に疑問が沸いたのは確かだ。人間が善であるはずがないという母狐の思いはその後変わることはないのかもしれない。大多数の私達がおそらくそうあるように、予期できなかった出来事に、もしかしたら彼等是我々が信じているより善なのかもと、他者の存在について考えてしまう、つまり、わずかに揺らぐ思いとそうした揺らぎが起きたことによる起きた疑念への自問が存在する。たとえ、その疑念への答え自体がその時には変わることはなくても、少なくとも2度繰り返して問うたのであり、あらたな揺らぎが起きた時に変わるかもしれない可能性を残しているのである。そう考えると、この①は、おそらく現実世界の私達に一番近い感情を示す英訳なのだろう。

しかし、こうも考えられるのだ。子狐と知りながらぴったりの手袋を差し出して

くれる優しい人間であったことを母狐が有難く思う気持ちはとても強いはずだ。無事に再会できて胸に抱き寄せる、まさに母狐が日常的美德の対象とする子である。トラウマゆえにどうしても町の中に一緒に行くことはできなかったけれど、母狐はどれほど心配し待ち続けたことか。その愛する子狐が「人間は怖くないや」と意気揚々と帰ってくることができたことに、彼が少しも傷つくことなく帰還できたことに、母狐は深く感謝しているはずだ。だからこそ、思いがけない話に母狐の気持ちに確実に揺らぎが起き、だからこそ繰り返して言うのである。自分に問い、それまでの考えを捨てて新しい答えを求めるかのごとく、2度も言うのだとも考えられる。揺らいだゆえに、それまでの考えが変わることもあるのだ。私達もそうである。出来事に遭遇し、否定的に見ていた他者性を示す異なる人々を善であるのかもと考えるし、実はそう考えたくもある、できれば、そう確信さえしてみたい。そうした人々は多く存在している。だからこそ、②と③の英訳も、①と同じく、とても現実的なのである。

何よりも大事なことは、物語の最後、母狐が動揺し、「揺らぎ」が起きたことなのである。揺らぎがあった時の思いが、①であれ、②であれ、③であれ、いいのだ。揺らぎ自体に希望があるのだから。揺らぎが起こらなかつたら、隔てられている他者との関係性は始まらない。かすかな希望、人間は本質的には恐ろしい存在ではないのかも、を打ち消すかもしれないし、信じ始めるかもしれない。どうであれ、揺らぎは起きたのだ。そもそも、①も②も③の英訳も可能とするような曖昧な日本語を新見南吉自身が原作で提示しているのである。母狐の言葉は、英訳の①でも、②でも、さらには③でもあり得たのだ。そして、①から③の全ての英訳が可能であるような日本語が物語の最後におかれていること自体が、作者の「異なる者との共生」に対する思いを示していると言えないだろうか。他者との関係性は最後まで現実的なままで、それでも一つの出来事に動揺し揺らぐ母親の最後の言葉に、何がしかの希望があるかもしれないと感じさせる、その読者の解釈さえも唯一一つではない。読者自身も「揺らぎ」、その思いが反映される余地が残され、この物語の終わりをさらに余韻の残るものとさせている。結局、他者とともに生きる覚悟は同じように一人ひとりに託されるしかない。その一人ひとりも、いつも同じ解釈をするの

ではなく、母狐と同じように、揺らぎながら、生きる中で自らの解釈を変え、他者との関係性を選択していく瞬間を持つのだろう。この物語が美しいのは、まさに「揺らぎ」の後、個々に託されている選択という行為の存在にあるのだと筆者は考えている。

おわりに

英雄としてではなく、反復である日々の労働をこなし、その行為に勇気と寛容さを当り前のように示して生きることができる者、そして、「異人性」を示す他者にまでその日常的美德の行動を広げることができる者、そうした人々の数を増やすために、より豊かな想像力と日常的美德をも超えた美德の育成という課題を絶えず持つところに、「異文化コミュニケーション教育」の「教育」としての希望があるのである。想像上では誰にでも私達はなり得る。狐にも人間にも、である。さらには母狐、子狐、帽子屋、人間の母と子、誰にでもだ。けれども、実際には、その場にあるものとしてしか存在を許されないのであり、文化の与える選択肢がすでに非常に限られている社会状況に置かれることも多い。まさにアッピアの言うように、「我々は選択を行うけれども、自分たちがその間で選ぶことになる選択肢の決定は行わないのである³⁴⁾」。それを前提とした上で、現実の社会に対する認識を持たないまま単に理想への謳い文句に酔う姿勢を教育する側は慎み、極限状態に置かれても人類が過ちと認めてきた選択肢を選択しない理性を育てる教育の在り方を、絶えず不安とともに謙虚に模索しなければいけないのであろう。

現実世界は、偶然性という点において極めて暴力的な出来事に満ちており、私達は自分の身に降りかかった、理不尽で混沌たる出来事を飲み込まず、理解不可能な状態におかれる。出来事は起きたけれども、その出来事に巻き込まれてしまっている以上、実際に起きたことはどうしても秩序立てて客観的に説明できるものにはなり得ない。それゆえ、その時点で、現実の重みの中で自分に選び得る別様の選択肢があったことを想像することすらできないかもしれない。

34) アッピア, K.A. 「アイデンティティ, 真正さ, 文化の存続—多文化社会と社会的再生産—」『マルチカルチャリズム』テイラー, C. 他 (編) 佐々木毅, 他 (訳), 岩波書店, 1996, p.221.

その一方、虚構世界として提示される「物語」は、その秩序を説明することによって、時間を超える永遠性を持ち得ることになる。優れた虚構の物語は、「現実」ではないけれど、「現実」を反映して、そのために「現実的」だと感じさせ、読者に真実とは何かを問わせ、物語の登場人物に、そしてひいては、自分に別の選択肢がある可能性を考えさせる。「現実的な」物語であるがゆえに、そこで生きている登場人物と自分も一緒に生き、強い感情を共有し、その過程において、虚構世界に触れなければ考えることもなかった真実について考えることができる。「人間は本当にいいものかしら」—『手袋を買いに』で最後に2度繰り返される母狐の言葉に表象された「揺らぎ」の瞬間を私達もまた何度も重ねるしかなく、その「揺らぎ」ゆえに起こる様々な感情を真摯に受け止めていく過程がおそらく「異なる者との共生」に向けての一步なのではないだろうか。そう思わせるゆえに、母狐の言葉は「現実的な」希望であり、『手袋を買いに』は「現実世界」において私達に希望を与える極めて「現実的な」虚構の物語となる。

多重 wh 疑問文のバランス

杉山正二

Abstract

In this paper, I would like to reconsider multiple wh-questions in English and claim that their grammaticality can be predicted naturally by our new balanced based explanation. From the descriptive viewpoint, in multiple wh-questions, the first wh phrase must be placed at the top position, while the other must be occupied at the end position. If and only if the structure keeps the above configuration, the inclination of the structure can hold well-balanced and be accepted as grammatical. In a sense, multiple wh-questions can be one of the most crucial phenomenon showing the effect of the balance notion in the theory of grammar.

1. 序論

多重 wh 疑問文 (multiple wh-question) とは, (1) が示すように, 一つの wh 疑問文の中に複数の wh 疑問詞が現れる特殊な wh 疑問文を指す¹⁾。以下, オリジナルの文献の中には, 痕跡 (trace), 指標 (index), 括弧 (bracket), 範疇 (category) などの表示がない場合もあることをお断りしておく。

(1) a. Where_i did you put what t_i?

b. What_i did you put t_i where?

(Fiengo, 1980:122)

1) 文頭に移動しない wh 句は「元位置の wh」(wh-in-situ) と呼ばれている。なお, wh 句が文中に留まること許される他の構文としては, 次のような問い返し疑問文 (echo question) が挙げられる。

(i) a. I bought a BMW yesterday.

b. You bought what?

(ii) a. If you built it, he will come.

b. If you built what, who will come? (映画 *Field of Dreams* より)

以下の対比が示すように、多重 wh 疑問文では主語 (subject) と目的語 (object) のあいだに非対称性 (subject-object asymmetry) が観察される。

(2) a. Who_i t_i saw what?

b. *What_i did who see t_i? (Fiengo, 1980:121)

この対比は、wh 句が主語と目的語の場合、主語の wh 句は文頭位置 ([SPEC,CP]) への義務的な移動 (movement) が適用されるが、目的語の wh 句は義務的に元位置に留まらなければならないという優位効果 (superiority effects) として一般に知られている²⁾。

初期のバランス理論では、優位効果を説明するために次のような傾斜に関する原則が提案された。

(3) 傾斜平衡の原則：英語の多重 wh 疑問文は傾斜平衡状態が最もバランスのとれた安定状態である。

条件 (i) 各 wh 句の重量は等しい。

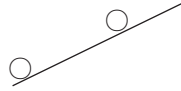
(ii) 文頭と文末にそれぞれ wh 句が配置されると、その文の傾斜は平衡状態となる。 (杉山, 1999:347)

この原則によって (2a) のような形式を持つ構造だけが容認されることが保証される。なぜなら、以下の傾斜構造が示しているように、(4a) のようにシーソーの両端に等重量の重りが配置された場合に限り、左右のバランスのとれた安定状態が保証され、一方 (4b) のように後方の wh 句が文末を占めない場合は、左右不均衡の

²⁾ 多重 wh 疑問文の文法性を巡って、生成文法では Chomsky (1973) の古典的な Superiority Condition を皮切りに、Lasnik and Saito (1984) の ECP, Pesetsky (1987) の Nested Dependency Condition, Lasnik and Saito (1992) の Absorption, Hornstein (1995) の Weak Crossover Principle, Chomsky (1995) の Minimal Link Condition, 一方、機能構文論からは Kuno and Takami (1993) の Sorting Key Hypothesis など実に様々なアプローチが提案されている。

傾斜が形成されるからである。

- (4) a. Who saw what? (=2a) b. *What did who see? (=2b)



本稿の目的は、杉山 (2021) で提案された新モデルの枠組みを用いて、(3) の傾斜平衡の原則を修正し、より広範囲の事実を説明することである³⁾。

2. バランス理論の枠組み

バランス理論の基本的精神は、杉山 (1998, 1999) から一貫しており、英語の文はその種類に応じて、それぞれ安定構造が指定されており、移動などの文法操作は安定状態を確保するための「最後の手段」(the last resort) として駆動されるというものである。問題の安定状態は「傾斜」(inclination) という認知的概念を用いて表される。構造の傾斜方向は文中の焦点 (focus) の位置によって決定される。(1) がバランス理論における焦点の定義、そして (2) が傾斜の定義である。

- (1) 焦点：文中で最も重要な情報を含む要素であると同時に、最も重たい要素である。(杉山, 1999:26)

³⁾ 以下の文法性の対比から明かなように、which 句のような、いわゆる談話連結された (discourse-linked) wh 句は、通常の wh 句が許されない元位置にも留まることができるので、本稿では議論の対象から外しておく。

- (i) a. *What_i did who read t_i?
 b. Which book_i did which student read t_i?
 (ii) a. *Who_i did Mary give who to t_i?
 b. Which boy_i did Mary give which girl to t_i? (Kotek, 2018:2, 11)

(2) 文の傾斜：焦点が文のX端に位置すると、その文はX方向に傾斜する

(X=右 or 左)。

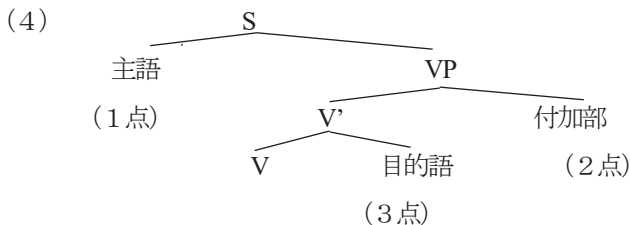
(杉山, 1999:28)

また、文中の要素は焦点が付与される前の段階、つまり深層構造 (deep structure) の段階から潜在的な重量が異なり、潜在的重量 (potential weight) が重たくなればなるほど、表層構造 (surface structure) において実際の焦点が付与される傾向が強くなると考えられる。潜在的重量は以下のように相対的に決定される。

(3) 階層構造上の位置と潜在的重量の相対的關係：階層構造上、下位に生成される構成素ほどその潜在的重量が増す。

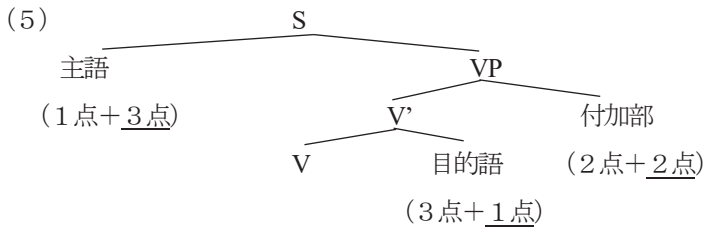
(杉山, 1999:45)

さて、初期モデルと新モデルとの大きな違いは二点に集約される。第一に、重量を可視化するために重量の得点化を導入したこと、第二に、潜在的重量が階層構造上の位置によって異なるのと同様に、焦点度重量 (focus weight) も位置によって相対化され、潜在的重量と焦点度重量は反比例の関係をなすと仮定したことである。まず、文中の主語、目的語、付加部 (adjunct) の潜在的重量はそれぞれ以下のように相対的に得点化される。



要するに、階層構造上の占める位置が主語、付加部、目的語の順に下がっていくにつれて、それぞれの潜在的重量が1点、2点、3点とランク付けされるという自然な発想である。一方、焦点化重量とは、表層構造において実際に文中の焦点として解釈される要素に付与される重量を指す。潜在的重量の軽い要素ほど有標の焦点

(marked focus) としての解釈が強まり、焦点度重量が相対的に増すと仮定する。その結果、目的語には無標の焦点 (unmarked focus) として 1 点、付加部には 2 点、そして主語には 3 点の焦点度重量が付与されると設定される。つまり、線形順序 (linear order) において文頭を占める主語が焦点を担うケースが最も有標度の高い構造とみなされるということである。もしこの仮定が正しいとすると、各要素の潜在的重量に焦点度重量 (下線を施す) が付与された段階は次のように想定される。



次に、wh 疑問文を派生する際に、wh 句となる要素には有標の焦点度重量として新たに 1 点が加算されると仮定する。その結果、動詞の目的語、主語、付加部を wh 句に置き換えて wh 移動を適用すると、当該 wh 句の総重量はすべて 5 点となるので、それぞれ以下のような同じ傾斜構造を形成することが導かれる。

(6) a. What_i did you eat t_i?

b.



(総重量：潜在的重量 3 点 + 焦点度重量 1 点 + wh 焦点度 1 点 = 5 点)

(7) a. Who t_i meet John?

b.



(総重量：潜在的重量1点+焦点度重量3点+wh 焦点度1点=5点)

(8) a. Where_i did you meet John t_i ?

b.



(総重量：潜在的重量2点+焦点度重量2点+wh 焦点度1点=5点)

ここで重要な帰結は、主語、目的語、付加部を問わず、文頭を占める wh 句の総重量はすべて同じ（5点）であるため、上の（6）から（8）の wh 疑問文は各 b の傾斜図が示すように、すべて同じ角度の左下降傾斜が形成されることである。この得点結果を文法性に反映させると、無標の wh 疑問文が従う文頭重心の原則は（9）のように定義することが可能となる⁴⁾。

（9）文頭重心の原則：英語の wh 疑問文は、左下降傾斜、つまり、焦点が文頭にある場合が最もバランスのとれた安定状態である。

条件：wh 句焦点の総重量 = 5点⁵⁾

(杉山, 2021:35)

3. 傾斜平衡の原則

さて、wh 句が一つのみ含まれる無標の wh 疑問文に対して、有標の多重 wh 疑問

⁴⁾ 文頭重心の原則と対極にあるのが、平叙文 (declarative sentence) が従う文末重心の原則 (end-weight principle) である。

(i) 文末重心の原則：英語の平叙文は、右下降傾斜、つまり、焦点が文末にある場合が最もバランスのとれた安定状態である。

条件：4点 ≤ 焦点の総重量 (潜在的重量+焦点度重量) ≤ 5点

(杉山, 2019:40)

⁵⁾ wh 句焦点の総重量は、潜在的重量と焦点度重量に加えて、境界範疇 (bounding category) からの取り出しなどの環境によっても決定される。詳細は杉山 (2021) を参照。

文には wh 句が二つ以上含まれるので、独立した原則が必要となる。ここで旧モデルの傾斜平衡の原則に再登場してもらおう。

- (1) 傾斜平衡の原則：英語の多重 wh 疑問文は傾斜平衡状態が最もバランスのとれた安定状態である。

条件 (i) 各 wh 句の重量は等しい。

- (ii) 文頭と文末にそれぞれ wh 句が配置されると、その文の傾斜は平衡状態となる。

第2節で述べたように、wh 句の総重量はすべて5点とカウントされるので、条件 (i) は特別に設ける必要がない。また、(ii) が述べている平衡状態も物理的観点からの自然な帰結なので、下位条件として設定する必要はない。そうすると、(1) の傾斜平衡の原則から二つの条件をすべて取り除くことが可能となり、傾斜平衡の原則は (2) のように単純化される。

- (2) 傾斜平衡の原則：英語の多重 wh 疑問文は傾斜平衡状態が最もバランスのとれた安定状態である。

それでは、傾斜平衡の原則の経験的妥当性を確認しておこう。第一に、多重 wh 疑問文は文頭と文末に wh 句が配置されなければ傾斜平衡状態が成立しないので、文頭に二つの wh 句が移動すると、(2) の原則違反として直ちに排除される⁶⁾。

⁶⁾ 従来の統語論的説明では、(3c) と (3d) の非文法性は、wh 句の着地点 (landing site) が文中に一つしかないという構造的制約に対する違反として一般に処理されてきた。

- (3) a. John wondered which book_i Bill bought t_i for whom.
 b. John wondered for whom_j Bill bought which book t_j.
 c. *John wondered which book_i for whom_j Bill bought t_i t_j.
 d. *John wondered for whom_j which book_i Bill bought t_i t_j.

(Haegeman, 1994:384)

上例では埋め込み文の傾斜構造を考察の対象とする。適格な (3a) と (3b) の傾斜構造は (4) のような平衡状態を保持しているのに対して、不適格な (3c) と (3d) は (5) のように文頭に二つの wh 句 (合計 10 点) が配置されるため、文頭過重の傾斜に陥っていることがわかる。

(4) ○ ——— ○

(5 点) (5 点)

(5)

○○ /

(5 点+5 点)

第二に、文末以外の位置に元位置の wh 句が留まった構造も、傾斜平衡状態が形成されないという理由で一律に排除することができる⁷⁾。

- (6) a. What_i did you give t_i to whom?
 b. *Who_j did you give what to t_j?
 c. To whom_j did you give what t_j?

(Fiengo, 1980:123)

⁷⁾ ただし、文法性の判断には母語話者のあいだで揺れが観察される。例えば、(6b) を Culicover (1997:220) は OK とし、(6c) を Kuno and Robinson (1972:474) はアウトとしている。

(7) a. Who gave a book to whom?

b. *Who gave whom a book? (Müller, 1995:322)

(8) a. Whom_i did you persuade t_i to do what?

b. *What_j did you persuade whom to do t_j? (Chomsky, 1995:560)

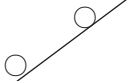
さらに、上例のような単文レベルだけでなく、(9)のような複文レベルでも文頭と文末に wh 句が配置されていなければならない⁸⁾。

(9) a. Who_i t_i thought that he did what?

b. *Who_i t_i thought that who did it? (Borsley, 1991:194)

傾斜図で確認してみると、上記の文法的な構造の傾斜はすべて (10a) の形式を持つものに対して、非文法的な構造の傾斜は (10b) の形式に陥っていることがわかる。

(10) a. 

b. 

第三に、たとえ上記の (3c) と (3d) のような非文であっても、文末要素を wh 句に変換することによって文法性が向上するという不思議な事実に対する説明が可能となる。なぜなら、(11b) のように文末要素に wh 句を追加することによって埋

⁸⁾ 主節と埋め込み文にそれぞれ wh 句が生じている場合であっても、以下の場合は wh 島の制約 (wh island constraint) に対する違反として処理される。

(i) a. *Why_i do you wonder [who left t_i]?

b. *What_j do you wonder [who bought t_j]? (Rochemont & Culicover, 1990, 15)

め込み文の文頭の wh 句と文末の wh 句とのあいだで傾斜平衡状態が形成されるからである⁹⁾。

- (11) a. *John wonders what_i who bought t_i at the store.
 b. John wonders what_i who bought t_i where. (Chomsky, 1981:238)
- (12) a. *What_i did who give t_i to Mary?
 b. What_i did who give t_i to whom? (Stroik, 2009:88)

4. 反例と解決案

本節では、一見したところ傾斜平衡の原則では説明が及ばない現象を挙げ、その解決案を検討する¹⁰⁾。

第一に、文頭と文末を wh 句が占めているにも関わらず、非文となるケースがある。次例を見てみよう。

- (1) *Who_i did [_{NP} pictures of t_i] please whom? (大庭, 1996:100)

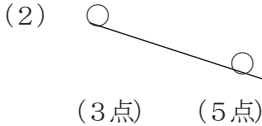
杉山 (1999) では、(1) は who の移動が主語条件 (subject condition) に違反することから多重 wh 疑問文の成立条件とは独立に阻止されると論じたが、現行モデルでは、主語 NP 内の wh 句の総重量が3点であることから、文末の whom (5点) と釣

⁹⁾ ただし、文頭と文末に wh 句が配置されている場合、文中に生起する主語 who はもはや傾斜形成に関与しないという規定が必要となる。つまり、wh 句が三つ以上出現した場合、傾斜決定に関与するのは文頭と文末の wh 句のみと考えておく。

¹⁰⁾ 文頭の wh 句が whether の場合は多重 wh 疑問文の解釈が成立しないので、本稿では議論の対象から除外する。

(i) a. I wonder who saw what.
 b. *I wonder whether Bill saw what. (Chomsky, 1973:282-3)

り合いが取れず、破綻すると説明される¹¹⁾。その説明が正しいとすると、(2)の傾斜図から明らかなように、(1)は傾斜平衡の原則に対する反例ではなく、むしろこの原則を強く支持する事例となる¹²⁾。



なお、(1)を主語条件に対する違反として単純に処理してしまうと、(3)の多重 wh 疑問文を誤って非文と判断してしまうことになる。

(3) Who_i did you give t_i which book?

11) 主語 NP 内に生起する補部 PP に直接支配される wh 句の総重量が3点となるのは、潜在的重量が0.25点、焦点度重量0.75点、wh 焦点度1点、境界範疇 NP からの取り出しとしての1点の総和となるからである。詳細は杉山 (2021) を参照。

ここで、以下の b 文が示すように、主語名詞句内に wh 句が留まれることを容認する話者が存在することが問題として浮上するが、なぜ (i b) が容認されるのかはオープンとしておく。

(i) a. *What did who annoy?

b. What did [_{NP} books about what] annoy most? (Stroik, 1996:80)

12) 元位置の wh 句が島 (island) の内部に生起する事例も文頭の wh 句と文末の wh 句のあいだで総重量の釣り合いがとれず破綻する。以下は複合名詞句内、付加部内、等位接続構造内に元位置の wh 句が含まれている。

(i) a. *Who likes [_{NP} books that criticize who]?

b. *Who was happy [after Mary fired who]?

c. *Who likes [Bob and who]? (Stroik, 2009:67)

ただし、同格節タイプの複合名詞句の場合、(i a)のような関係節タイプと異なり、文法性が向上する場合がある。これは、同格節が主要部 N の補部であるため、その内部に生起する項 (argument) の wh 句の潜在的重量が増加するためと考えられる。後述するように、非項 (non-argument) の why は重量不足でアウトと判断される。

(ii) a. Who believes [_{NP} the claim [that Mary read what]]?

b. *Who believes [_{NP} the claim [that Mary read the book why]]? (Müller, 1995:286)

なぜなら、(4a) と (4b) の文法性の対比が示すように、二重目的語構文 (double object construction) では、直接目的語 (direct object) の *wh* 移動は可能であるが、間接目的語 (indirect object) の *wh* 移動は単独では許されない可視移動 (overt movement) であるため、(3) における *who* の文頭への移動がそもそも阻止されてしまうからである。

(4) a. *Who_i did you give t_i the book?

b. What_i did you give John t_i? (Bowers, 1993:645)

したがって、多重 *wh* 疑問文の議論においては、あくまでも多重 *wh* 疑問文自体の制約として考察する必要がある。

第二は、第一とは逆に、文末に *wh* 句がないにも関わらず、文法的と判断されるケースである。次例では二番目の *wh* 句が文末を占めていない。

(5) I wonder who drank how much at the party last night.

(Kuno & Takami, 1993:90)

ここで、(5) と既に挙げた完全にアウトな構造を比較してみよう。すると、非文法的な (6) の事例では、元位置 *wh* 句に後続する要素が省略できない文の必須要素であるのに対して、(5) の *at the party last night* という「場所」と「時」を表す副詞句の連鎖は随意的要素にすぎないことがわかる¹³⁾。

13) 平叙文における無標の焦点は動詞の目的語、つまり、以下では *Mary* であり、場所や時を表す副詞句はたとえ目的語よりも文末に近い要素であっても無標の焦点としては解釈されない。

(i) John met Mary at the party yesterday.

これは、文末重心の原則を表面的な線形順序で解釈してはならないことを示している。

- (6) a. *What did who see? (= 1 節 (2b))
 b. *Who_i did you give what to t_j? (= 3 節 (6b))
 c. *Who gave whom a book? (= 3 節 (7b))
 d. *What_i did you persuade whom to do t_j? (= 3 節 (8b))

そこで、杉山 (1999) において仮定したように、省略可能な副詞句は文の傾斜決定に関しては「見えない (invisible)」と想定する。そうすると、(5) は who と how much のあいだで傾斜平衡の関係が成立することになる。なぜなら、たとえ at the party last night が文末位置に生起していても、多重 wh 疑問文では文末要素とはみなされないからである。一方、(6) の文末要素 see, to, a book, to do はそれぞれ文中の義務的要素であるため、二番目の wh 句が文末を占めないことになり、排除されると結論付けることができる。

第三は、二重目的語構文における間接目的語と直接目的語の非対称性である。以下の対比は一見したところ、傾斜平衡の原則では説明できない。なぜなら、両者とも文頭と文末に wh 句が正しく配置されているからである。

- (7) a. Who_i did you give t_i which paycheck?
 b. *Which paycheck_i did you give who t_i? (Larson, 1988:337)

ここではこの非対称性問題を解決するために、傾斜平衡状態を確保するための可能な手段が複数存在する場合、最も効率のよい wh 移動、つまり、文頭位置までの距離が最短の wh 移動が選択されると仮定する。このような経済的な制約は従来から主張されているものであり、極めて自然な発想である。そのような最短距離移動の制約が正しいとすると、上例では間接目的語 whoの方が直接目的語 which paycheckよりも文頭に近いという理由から (7a) が選ばれ、(7b) が選ばれないことが帰結

される¹⁴⁾。

第四は、付加部の *wh* 句の中に多重 *wh* 疑問文に使用できるものと、使用できないものがあるという事実である。

(8) a. *What_i did you buy t_i when/where?*

b. *When/Where_i did you buy what t_i?* (Lee, 1993:179)

(9) a. **What_i did Chris read t_i why?*

b. **What_i did Chris read t_i how?*

(10) a. **Why_i did Chris read what t_i?*

b. **How_i did Chris read what t_i?* (Stroik, 2009:61)

上例から明らかなように、*when/where* は文頭に移動することも元位置に留まることも可能であるのに対し、*why/how* はどちらも容認されない¹⁵⁾。この対比も一見した

14) 典型的な傾斜平衡の原則に対する違反でも最短距離移動の制約違反が同時に発生する。

(i) a. *Who saw what?*

b. **What did who see?* (=序論 (4))

なお、同じ動詞の内項 (internal argument) であっても、以下のように名詞句と副詞句、あるいは前置詞句のあいだで文法性に差が生じることはない。ここではその理由として、両者の範疇が異なるため距離に関する競合が発生しないと暫定的に考えておく。

(ii) a. *Where_i did you put what t_i?*

b. *What_i did you put t_i where?* (=序論 (1))

(iii) a. *Who_i did you give what to t_i?*

b. *To whom_i did you give what t_i?* (=3節 (6))

実際、補部と付加部という階層構造上の違いがあっても、両者の範疇の違いがある場合は、距離に関する競合は生じない。

(iv) a. *Where_i did you buy what t_i?*

b. *What_i did you buy t_i where?* (Kuno & Robinson, 1972:474)

蛇足ではあるが、いくら距離に関する競合が発生しなくても、最終的な構造が傾斜平衡の原則に違反する場合は正しく排除される。

(v) a. *Whom_i did John prove t_i to be guilty when?*

b. **When_i did John prove whom to be guilty t_i?* (Bošković, 1997:120)

ところ、傾斜平衡の原則では予測できないが、(8)と(9,10)の文法性の対比は傾斜平衡の原則に不備があるというよりも、when/where と why/how のあいだに内在的な違いがあることを示唆しているように思われる。例えば、以下の(11)から明らかのように、when/where は前置詞 (preposition) の目的語位置に生起可能であるが、why/how は不可能である。この差は、当該 wh 句が格 (Case) を持つかどうかという名詞性の強さに還元される。なぜなら、前置詞は読んで字のごとく、名詞の前にのみ生起する範疇なので、(11a)と(11b)が文法的であるという事実は、取りも直さず、when/where の名詞の度合いが強いことを物語っているからである¹⁶⁾。

- (11) a. From where did he come?
 b. Since when have you been?
 c. *For why did he come?
 d. *By how did he come? (Huang, 1982:536)

つまり、格という観点から見ると、where/when は項の wh 句と近い性質を持つのに対して、why/how は明らかに非項の wh 句にほかならないことがわかる。そこで、項に近い where/when は項の what と同等の wh 焦点度 (1点) を有するのに対して、

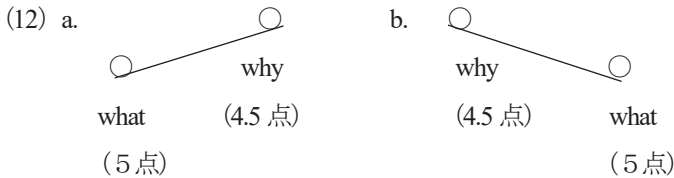
15) 興味深いことに、元位置に生起することが許されない why であっても、文中の wh 句が追加されると文法性が向上することが観察されているが、ここではオープンとしておく。

(i) a. *Who bought the book why?

b. Who bought what why? (Kuno & Takami, 1993:197)

16) 日本語でも「いつから、どこから、いつまで、どこまで」のように「から、まで」の格助詞が「いつ、どこ」の疑問詞に後続することは可能であるが、「*なぜから、*どのようにから」のように「なぜ、どのように」の疑問詞に格助詞が付くことはない。なお、時の「いつ」と場所の「どこ」のあいだにも差があり、「どこに、どこへ」は可能だが、「*いつに、*いつへ」のように格助詞の「に、へ」が「いつ」に付くことはない。ただし、その説明では「なぜに」が可能なので、「なぜ」の名詞性が強いことになるが、「なぜに」は「なにゆえ (何故) に」の短縮形だと考えておく。

非項の why/how の wh 焦点度は1点未満、仮に0.5点と設定する¹⁷⁾。もし、その差が妥当であるなら、例えば (9a) と (10a) の傾斜構造は、それぞれ (12a) と (12b) のようになり、what が先に移動しようが、why が先に移動しようが、いずれにせよ傾斜平衡の原則に対する違反が発生することが導かれる¹⁸⁾。



5. まとめ

バランス理論では、wh 疑問文が従う傾斜原則として (1) の文頭重心の原則が仮定されているが、多重 wh 疑問文は wh 句を二つ以上有する有標構文であるため、本稿では特別に (2) の原則に従うことを提案した。

17) 杉山 (1999) では、[+N]素性を持つ wh 句は、それを持たない wh 句よりも潜在的重量が重たいと仮定したが、新モデルでは wh 句の焦点度の違いとして捉えることになる。

18) why/how の wh 焦点度が1点未満と設定されるのは、あくまでも多重 wh 疑問文という環境の中で、しかも項の wh 句と比較された場合に限定される。したがって、単独で使用された場合の wh 焦点度は1点なので、正しく文頭の重心の原則に従うことになる。

(i) a. Why_i did you go there alone t_i?

b. How_i did you go there alone t_i?

ただし、文法性の判断には揺れが観察される。例えば、why の場合、元位置は容認しなくても文頭位置なら OK と判断する母語話者がいる。

(ii) a. *What_i did she buy t_i why?

b. Why_i did she buy what t_i?

(Müller, 1995:271)

このような個人差はどこから生まれてくるのかも興味あるトピックである。ここでは暫定的に、文頭位置に移動する why は、他の wh 句と同列に捉えられ、総重量が5点としてカウントする話者がいると考えておく。多重 wh 疑問文の文頭に生起する why の容認可能性に個人差が観察されるのは、まさにバランス感覚の個人差に還元されるという方針であるが、(10a) の *Why did Chris read what? を排除する一方で、(ii b) の Why did she buy what? を合法化するのは、どのような枠組みでも困難であろう。

- (1) 文頭重心の原則：英語の wh 疑問文は、左下降傾斜、つまり、焦点が文頭にある場合が最もバランスのとれた安定状態である。

条件：4点 $\leq$ wh 句焦点の総重量 $\leq$ 5点

- (2) 傾斜平衡の原則：英語の多重 wh 疑問文は傾斜平衡状態が最もバランスのとれた安定状態である。

相対的な重量差をベースにした修正モデルの視点から、旧モデルの傾斜平衡の原則を再考した結果、これまでは記述レベルにすぎなかった優位効果が自然に帰結されることを主張した。文頭と文末の wh 句の重量が等しく、その結果、構造がシーソーのような平衡状態を保つときのみ、適格な多重 wh 疑問文として容認されるという発想は、バランス理論ならではの独創的な考え方である。本稿で主張したように、バランスという概念が多重 wh 疑問文の適格性判断にも有効であることが明らかになれば、バランス理論が文法理論上、有意義である可能性がさらに広がったと言えるだろう。

参考文献

- Borsley, R.D. (1991) *Syntactic Theory*. London : Edward Arnold.
- Bošković, Ž. (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Bowers, J. (1993) "The syntax of predication," *Linguistic Inquiry* 24, 591-656.
- Chomsky, N. (1973) "Conditions on transformations," *A Festschrift for Morris Halle*. ed. by S. Anderson and P. Kiparsky, 232-286. New York : Holt, Rinehart and Winston.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht : Foris.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Culicover, P. (1997) *Principles and Parameters*. Oxford : Oxford University Press.
- Fiengo, R. (1980) *Surface Structure*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Haegeman, L. (1994) *Introduction to Government and Binding Theory*. Oxford : Blackwell.
- Hornstein, N. (1995) *Logical Form*. Oxford : Blackwell.
- Huang, C.T.-J. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*.
Doctoral dissertation, MIT

- Kotek, H. (2018) *Composing Questions*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Kuno, S. and J. Robinson (1972) "Multiple wh questions," *Linguistic Inquiry* 3, 463-487.
- Kuno, S. and K. Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Larson, R. (1988) "On the double object construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Lasnik, H. and M. Saito (1984) "On the nature of proper government," *Linguistic Inquiry* 15, 235-289.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move α* . Cambridge, MA : MIT Press.
- Lee, E.-J. (1993) "Superiority effects and adjunct traces," *Linguistic Inquiry* 24, 177-183.
- Müller, G. (1995) *A-bar Syntax*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- 大庭幸男 (1996) 「優位効果と最小連結条件」『英文学研究』73 巻 1 号, 89-106.
- Pesetsky, D. (1987) "Wh-in-situ : movement and unselective binding," in E. Reuland and A. ter Meulen (eds.) *The Representation of (In)definiteness*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Rochemont, M.S. and P. Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Stroik, T. (1996) *Minimalism, Scope and VP-Structure*. Thousand Oaks, CA : Sage.
- Stroik, T. (2009) *Locality in Minimalist Syntax*. Cambridge, MA : MIT Press.
- 杉山正二 (1998) 「多重 Wh 疑問文の適格性について」『英語英米文学論集』7, 67-75.
- 杉山正二 (1999) 「英語の焦点移動現象 — バランス理論からの考察 — 」学位論文, 安田女子大学
- 杉山正二 (2019) 「文末重心の原則と右方焦点移動 (Part 1) — 重名詞句移動 — 」『英語英米文学論集』28, 21-41.
- 杉山正二 (2021) 「文頭重心の原則と wh 移動 — 焦点度重量の相対化 — 」『英語英米文学論集』30, 31-49.

「母」からの転落 —Free Fall の精神分析的読解—

井 上 彩

Abstract

本論文は、ウィリアム・ゴールディングの第四作目の長編作品である、*Free Fall* (1959) に登場する主人公サミュエルと、ピアトリスを中心とする女性たちについて、精神分析的観点から掘り下げる。フロイトの「エディプス・コンプレックス」や、ラカンの「想像界」「象徴界」「ファルスの享楽」といった概念を援用ながら、最終的には、*Free Fall* という作品が、サミュエルがエディプス的な「母」と決別する物語であるということを証明する。

1. *Free Fall* という作品

20 世紀を代表するイギリス人文学作家、ウィリアム・ゴールディング (William Golding, 1911-1993) による第四作目の長編作品 *Free Fall* (1959) ¹⁾ は、主人公である中年の画家、サミュエル・マウントジョイ (Samuel Mountjoy) による次のような疑問から端を発する。

When did I lose my freeform? For once, I was free. I had power to choose. (p. 5)

僕はいつ自由を失ったのだろうか？かつて、僕は自由だった。僕は選択する力を持っていた。

¹⁾ 以下、Golding, William. *Free Fall*, Faber, 1959.からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す。また、日本語訳は筆者によるものである。

サミュエルによると、彼は過去のどこかの時点で選択する力を行使し、その選択の結果、選択する力を、つまりは自由を失ったのだという。この考えに固執するサミュエルは、物語の中で、自分の幼年期、幼少期、青年期、そして現在に至るまでの回想²⁾を行い、その選択がいつ行われてしまったのかを突き止めようとする。それ故、これは*Free Fall*の最大の特徴でもあるのだが、本作品はサミュエルによる第一人称の語りによって構成されている。読者は語りを通してサミュエルという人間の変遷について知るところとなるのだ。サミュエルの回想によると、彼は選択する力を失った結果、青年期にある罪を犯している。その罪とは、結婚を前提として交際していたビアトリス・アイヴァ（Beatrice Ifor）という女性を捨てて、逃げたことであった。

本稿は、*Free Fall*に登場する、ビアトリスを含む女性たちとサミュエルの関係性に注目し、精神分析的観点から解釈する。まず本稿の第二節で、サミュエルのビアトリスに対する一体化への願望と、その起源を確認し、第三節で、その願望を引き継いだビアトリスに改めて注目する。そして、そのビアトリスへの願望がどのようにして断ち切られたのかについて考察する。本稿の最終的な目的としては、ジークムント・フロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）、そしてジャック・ラカン（Jacques Lacan, 1901-1981）によって解釈されたエディプス・コンプレックス（“Oedipus complex”）の概念を主に援用しながら、本作品はサミュエルがエディプス的な「母」³⁾から決別する物語であるということを証明し、なぜサミュエルがビアトリスから逃げたのかという問いに答えを提示することである。

²⁾ この回想は、サミュエルの意識が反映されているため、必ずしも時系列順によって構成されない。第七章までは幼年期から順を追って回想されるが、第八章からは突然少年時代の回想に戻るなど、読者にとって予想不可能な展開がされる。故に、*Free Fall*はこの時間構成について注目する批評が多い。例えば次の著作参照。宮原一成『ウィリアム・ゴールディングの読者』、開文社、2017, pp. 77-115.

³⁾ 混乱を避けるため、本稿ではエディプス的な母親を表すときには括弧に入れて「母」と表記する。同様にして、エディプス的な子どもを表すときには「子」、父親を表すときには「父」と表記する。

2. 「母」との一体化を求めるサミュエル

2-1. 一体化への願望とその起源

後にビアトリスを捨てて逃亡するのだが、それ以前のサミュエルのビアトリスへの想いは狂氣的といえるほど凄まじいものであった。これは次の発言からも明らかである。

“I said I loved you. Oh God, don't you know what that means? I want you, I want all of you, not just cold kisses and walks—I want to be with you and in you and on you and round you—I want fusion and identity—I want to understand and be understood—oh God, Beatrice, Beatrice, I love you—I want to be you!” (p. 105)

「君を愛していると言ったろう。ああ、それが意味することが分からないのかい？ 君が欲しいんだ、君のすべてが欲しいんだ、冷たいキスや散歩だけじゃなくて—僕は君と一緒にいたい、君の中に、君の上に、君の周りに—融合と同一性が欲しい—僕は理解し、理解されたいんだ—ああ、ビアトリス、ビアトリス、君を愛してる—僕は君になりたいんだ！」

サミュエルはビアトリスを愛するあまり、ビアトリスになりたいという趣旨の発言を繰り返すのだが、これはただ彼女を口説くために大げさに言っているわけではない。サミュエルはまさに、ビアトリスとの一体化を望んでいたのである。そしてこのような特殊な想いには起源があるという。

“Beatrice”

“Mm?”

“What is it like to be you?”

A sensible question; and asked out of my admiration for Evie and Ma, out of my adolescent fantasies, out of my painful obsession with discovery and identification. An impossible question.

“Just ordinary.” (pp. 102-103)

「ビアトリス」

「なに？」

「君になるってどんなかんじ？」

気の利いた質問。そして、エヴィとママへの称賛から、思春期の空想から、僕の発見と同一化に対する痛切な執着から発せられた。無理な質問。

「ただ普通よ。」

高本もこの場面に注目し、指摘しているが、サミュエルのビアトリスと同一化したという想いの起源はエヴィ (Evie) という少女と、サミュエルの実母であるママ (Ma) ⁴⁾への想いから生じている⁵⁾。さらにその想いというのが、「子」が「母」との一体化を望む段階、つまりは、エディプス・コンプレックスの初期の段階を彷彿とさせる。これから、エディプス・コンプレックスという概念について確認した後、サミュエルの願望の起源といわれているエヴィと母親について注目する。

2-2. 母とエヴィを崇拝する幼児サミュエル

エディプス・コンプレックスとは、生まれたばかりの「子」が「母」を愛し、母との関係を妨害する「父」を憎むという無意識の心的機制のことである。フロイトは、「子」がどのようにしてエディプス・コンプレックスという段階へ至るかを次のように語る。

やがて少年は新たな知識に基づいて、母親を強く愛し始め、こうした欲望を満たすことを妨げている父親を恋敵として新たに憎み始めるのである。このように

⁴⁾ サミュエルは実母のことを言及するとき、必ずママ (“Ma”) と呼び、本来の名前については言及しない。故に彼女の名前は不明である。

⁵⁾ 高本孝子「Free Fall 小論—テーマと語りの手法における二項対立の2つの要素—」, *Journal of National Fisheries University*, 44(4), 1996, p. 196.

して少年はいわゆるエディプス・コンプレックスに支配されるようになる。⁶⁾

この心的機制は、やがて「父」を憎む「子」が、絶大な力を持つ「父」を受け入れ、従い、「母」との一体化を諦める方向へと「子」を導くことになる。では、本編でサミュエルとエディプス的な「母」がどう描写されているかを見ていく。

エディプス的な役割をする「母」というのは実母である必要はない。よって、サミュエルの実母である彼女は、実際の母親だからといって精神分析的な「母」であるとは言い切れない。しかし、サミュエルの幼児期の回想が扱われる *Free Fall* 第一章で、いかに彼女がその時代のサミュエルにとって絶対的な存在であったかが語られていることを鑑みると、彼女はその役割を担っていたと考えられる。次の場面では、そのような当時の母に対する自分の感覚を、現在のサミュエルが粘土を使って表現しようとする。

These last few months I have been trying to catch her in two handfuls of clay—not, I mean, her appearance; but more accurately, my sense of her hugeness and reality, her matter-of-fact blocking of the view. Beyond her there is nothing, nothing. She is the warm darkness between me and the cold light. She is the end of the tunnel, she. (p. 15)

この数か月間、僕は両手に握った粘土で彼女を捉えようとした—これは彼女の外見を、というわけではない。より正確には、彼女の巨大さと現実、彼女の淡々と視界をすべて遮断してしまうことに対する僕の感覚を、捉えようとした。彼女を越えたところには何もない。何もないのである。彼女は僕と冷たい光の間の暖かな闇である。彼女はトンネルの出口であるのだ。

ただしこの試みは失敗する。ほとんどの幼児にとって特別なことではないが、サミ

⁶⁾ フロイト『フロイト、性と愛について語る』、中山元訳、光文社、2021、p. 16

ュエルにとってもこの母親がただの他者ではなく、絶対的な<他者>⁷⁾として存在しており、そのような存在に対する感覚を捉え、表現することは不可能なことなのだ。

サミュエルの実母以外にも、「母」の役割をするキャラクターが存在する。それがエヴィ⁸⁾である。彼女はサミュエルとそれほど歳の変わらない近所の女の子で、サミュエルの口を拭ったり、手をひいたり世話を焼く。注目すべきことに、彼女は単なる姉のような他者ではなく、サミュエルを支配する<他者>として描写される。これは次の出来事が大きく影響していると考えられる。ある時、サミュエルの住んでいた家の間借り人が死に、サミュエルは彼がなにやら立派な車で運ばれていくのを目撃する (p. 27)。サミュエルはその死体を実際に見ることはなかったのだが、エヴィは違った。エヴィは、その死体を見て、さらに死人の鼻を人差し指で触ったのだといってサミュエルに語るのである (p. 28)。それからエヴィは、サミュエルにとってサミュエルが到達することのできない死の秘密を握る者、究極知を持つ者⁹⁾となる。間借り人が死んだ後、ただ歩道で死人を運ぶ車を見送るだけだったサミュエルは、死の秘密に触れた、自分を遥かに超越する彼女に嫉妬することすらできない。

Then, as always, I stood, only partly comprehending, on the pavement. But Evie was always at the heart of things. She was a year or two older and she bossed me. How could I be jealous of Evie who knew so much? (p. 28)

そのとき、いつものように、僕はただ部分的にしか理解できないまま、歩道に立っていた。しかしエヴィはいつも物事の核心にいたのだ。彼女は一つか二つ年上で、僕を支配していた。なんでも知っているエヴィを僕がどう嫉妬しようというのか？

⁷⁾ 本稿では、ラカンの概念である小文字の他者 (“the other”) と大文字の他者 (“the Other”) を区別するため、大文字の他者については<他者>と表記する。

⁸⁾ エヴィという名前は『創世記』に登場する、全人類の母であるイヴ (“Eve”) を彷彿とさせる象徴的な名前である。

⁹⁾ サミュエルは実母もなにか秘密の力を持っていたと述べている (p. 10)。

ただしエヴィは、単なる崇拜対象ではない。彼女はひどく嘘つきで、さまざまな恐ろしい嘘で幼いサミュエルを翻弄するのだ。エヴィはサミュエルを怖がらせては、その恐怖している様子を見て満足する。

I adored Evie. I was grief-stricken and terrified. She nursed this terror as a tribute to the reality of the situation. (p. 32)

僕はエヴィを崇拜した。僕は悲しみ打ちひしがれ、恐怖した。彼女はこの恐怖を現実に対する貢物として慈しんだ。

こうして母とエヴィは幼児サミュエルの精神世界に並ぶ二つの塔（“my twin towers”）としてその勢力を振るっていたのである。ここでは「子」が「母」から独立する契機となる、エディプス・コンプレックスの次の段階へ移行するために必要な「父」の影がはっきりとあらわれていない。

2-3. 不在の父と鏡

通常であれば、「母」の真の欲望の対象として、「父」が登場するはずである。ただし幼児サミュエルを取り巻く環境は特殊であった。まずサミュエルには実父がいない。サミュエルは母親に、「ノシパはどんな人だったの、ママ？」（“What was my dad, Ma?”）と繰り返し質問する（p. 11）。飲んだくれの彼女はこの質問に答えるが、父親は時には軍人であったり、また時には皇太子であったり、今度は牧師になったりするのである（pp. 11-12）。結局のところ父親が本当は何者だったかについてサミュエルは知ることができない。もちろんここでも「父」の役割は実父でなければいけないわけではないが、幼児期のサミュエルの周辺にはやがて理想的な自我の基盤となる存在がいないのだ。また、彼が生まれ育ったロトン・ロウ（Rotten Row）という環境も、「父」の影のない町であった。

キンケード・ウィークスとグレガーは、ロトン・ロウをサミュエルにとってのエデンであったと解釈する¹⁰⁾が、実際のロトン・ロウは落ちぶれたスラム街であった。この場所に住む子どもたちは人間というよりも動物であったという。

I crawled and tumbled in the narrow world of Rotten Row, empty as a soap bubble but with a rainbow of colour and excitement round me. We children were underfed and scantily clothed. . . . We were noisy, screaming, tearful, animal. (p. 17)

僕は、シャボン玉のように空っぽで、でも虹の色や興奮で包みこむロトン・ロウの狭い世界で這ったり転んだりしていた。僕たち子どもは食事を与えられず、ろくな服を着ていなかった。…僕たちは騒がしく、叫び、泣き、動物そのものであった。

このような猥雑な町であるロトン・ロウは、ラカンの概念である想像界 (“the Imaginary”) の要素を持っている世界であるといえる。ラカンによると、幼児は始め、バラバラのイメージを寄せ集めた想像界の住人である。そこに規則はなく、「子」は自分という確立した自我を持たない。しかし、後に「父」を受け入れることで、「子」は整頓された象徴界 (“the Symbolic”) という、法の世界へ参入する。こうして、「子」は「母」から独立していき、自分の自我を形成していくことになる。この自我を形成するための基盤として理想的な役割を担うものに、「鏡」があげられるのだが¹¹⁾、ロトン・ロウではその鏡の存在が欠如している。

There was no mirror within my reach and if Ma ever had one it had vanished by the time I was a conscious boy. (p. 17)

¹⁰⁾ Kinkead-Weekes and Gregor. *op.cit.*, p. 171.

¹¹⁾ この段階のことを鏡像段階 (“the mirror stage”) という。Lacan, Jacques. *Écrits*, Translated by Bruce Fink, Seuil, 1966, p.93 参照。

僕の手の届くところに鏡はなかった。そしてママが持っていたとしても、僕が物心つくまでに消えてしまっていた。

サミュエルはやがてエヴィに連れられて幼児学校へ行くようになり、このロトン・ロウから足を踏み出す。社会や規則のことを学び、そこで鏡やたくさんの他者である子どもたちと出会ったことだろう。故に、サミュエルが象徴界に参入していないわけではないが、幼児期のこのような経験、すなわち、父親が不在であることや、ロトン・ロウが猥雑な町で、鏡がないという環境に身を置いていたサミュエルは、「母」から独立するのではなく、一体化したい、という欲望を残したままにしてしまうのだ。ただし、幼児期に「母」の役割を担っていたエヴィはサミュエルのもとを離れ、サミュエルの実母も彼が少年のうちに死に別れることとなる。そして、次に「母」を引き継ぐ者として、ビアトリスがサミュエルのもとにあらわれるのである。こうして母とエヴィとの関係性が、ビアトリスへの想いの原点となるのであった。

3. 「母」を引き継ぐ者と、その転落

3-1. 「母」を引き継ぐ者

サミュエルはビアトリスと芸術学校で出会い、恋に落ちる。ただし、母とエヴィへの想いを引き継ぐことになったビアトリスは、やはりサミュエルにとって単なる他者ではない¹²⁾。このことはサミュエルが彼女の顔を正しく認識できないことから伺うことができる。

¹²⁾ タイガー (Virginia Tiger) は、ビアトリスがダンテ (Dante Alighieri, 1265-1321) の『神曲』に登場するベアトリーチェ (Beatrice) がモデルになっていることを取り上げながら、ダンテにとってベアトリーチェがそうであったように、サミュエルにとってもビアトリスは完全に優れた者、完全な<他者> (“a creature wholly superior to himself, wholly Other”) だと指摘している。Tiger, Virginia. *William Golding: The Dark Fields of Discovery*, Calder & Boyars, 1974, p. 156.

She was of fearful importance and yet when the door closed behind her I could not remember her face. I could not catch this particular signature of being which made her unique; I could not remember it. I could only suffer. Then when she appeared again my reeling heart recognized a beauty that is young as the beginning of the world. (p. 223)

彼女はとても大切なのに、彼女が出て行ってドアが閉まったとき、僕は彼女の顔を思い出せなくなる。僕は、彼女を唯一無二のものとさせているこの特別な記号を掴むことができなかった。それが思い出せなかった。僕はただ苦しむだけだった。それから彼女がまたあらわれたとき、僕の揺れる心は、世界の始まりのように若い美しさを認識した。

このようにサミュエルはビアトリスを一人の人間として見られていないのである。サミュエルによる回想でも、ビアトリスの顔の詳細な描写はされない。画家であるサミュエルが、やがて恋人になったビアトリスを描こうとしたときも、その身体だけを描き、顔を描くことはない (p. 120)。唯一ある表現は、ビアトリスの額のまわりに、天国の光が射しているといった曖昧なものである (p. 224)。幼児期の母に対する感覚を粘土で表現できないのと同じように、彼女を捉えることは不可能であるのだ。高本は、ビアトリスの顔が描写されない理由として彼女の自我が欠如していたからだと解釈する¹³⁾。確かにビアトリスは受動的な性格ではある。ただし、サミュエルと結婚を前提に付き合い始め、彼の要求に負けて性交渉をした際、彼女は生焼けの宗教心 (“her half-baked sectarianism”) によって不感症になっていたり (p. 120)、またサミュエルに捨てられた際、精神を病み、精神病棟の住人になるほどにまで狂ってしまうことから、自我が欠如していたわけではなく、表層に出ていないだけでむしろ自我の強い女性であると考えることができる。またこれは本稿で詳しく後述するが、ビアトリスが「母」の座を退くことになり、精神病棟でサミュエルと再会した際、彼女の顔が仔細に描写されていることにも注意したい。故に、(物語の終盤

¹³⁾ 高本, *op.cit.*, p. 198.

を除き) 彼女の顔が描写されないのは、ビアトリスの自我が関係しているのではなく、サミュエルがビアトリスを普通の他者として見られていなかったことに問題があると考ええる。

3-2. 一体化への試みと失敗

ではサミュエルの「母」への、ビアトリスへの一体化願望はどのように解釈することができるだろうか。本稿の第二節で、サミュエルの取り巻く環境が、本来エディプス・コンプレックスを経て断ち切られているはずであるエディプス的な「母」と一体化したいという欲望から完全に抜け出せないままにしたのだと述べた。このようなサミュエルの「母」なる者と一体化したいという願望は、「享楽」(“jouissance”)の概念に通ずるものがあると考えられる。ラカンによって享楽は明確に定義されていないが、本稿では享楽を、人間が「母」から生まれることで、自我を持つようになったことで失ったものであり、これを取り戻すということは究極には死であるという解釈を前提にして取り扱う。そうすると、サミュエルの真に求める一体化とは、自身の自我を捨て、「母」のもとに還ることであると言い換えることができるだろう。サミュエルは強迫観念のように、ビアトリスと一つになることを求める。そうすることで、彼もビアトリスのもつ秘密を知ること (p. 104)、つまり、自分も享楽を得ることができると信じて疑わなかったのだ。ただしこのようなことは、死ぬこと以外では現実的に不可能である。さらに、実際にサミュエルの取った手段は、ビアトリスを通して享楽に到達することを不可能にした。彼は性交渉を通して、ビアトリスとの一体化を図ったのである。そしてこれはやはり彼の望んだ結果をもたらさなかった。

She wasn't the boss any more. Instead of my searching her face for a clue, wondering what was inside, I found myself being watched. After our one-sided lovemaking, I would wander up and down the room, thinking to myself that if this was all, there was nothing that would give us a unity and substantial identity. (p. 119)

彼女はもう僕の支配者ではなかった。僕が、中身はどうなっているのだろうか
と、彼女の顔にヒントを探す代わりに、僕自身が見られていることに気づい
た。一方的な性交渉の後、僕は部屋を歩き回りながら考えた。もしこれがすべ
てなら、僕たちを融合させ、同一のものとさせるものは何もないのだと。

この出来事をきっかけとして、サミュエルはビアトリスのことを「母」として見ら
れなくなっていくのである。彼女は彼を超越する者ではなくなる。これは、彼の取
った手段が、「ファルスの享楽」(“jouissance phallique”)¹⁴⁾に属するもので、これは享
楽に達するまでの障碍になる。ファルスの享楽とは人間が享楽へ至るまでの回り道
のようなものであり、むしろ享楽へ到達するのを不可能にさせるのだ¹⁵⁾。

3.3. 犬になるビアトリス

サミュエルは彼の求めている意味で、ビアトリスと一体化することが不可能であ
ることを知り、絶望する。この時点で、サミュエルは「母」との一体化を諦めよう
としているのだが、これをさらに助長する出来事が起こる。性交渉の後、ビアトリ
スがサミュエルの将来の妻として、へりくだり始めるのだ。

She was adjusting herself to a conceived place in life. She was beginning to look up, to
belong, to depend, to cling, to be an inferior in fact, however the marriage service may gloss
it. Instinctively she was becoming what she believed to be a wedded wife. (p. 119)

彼女は自身を人生におけるここだと思われる場所に適応させていた。彼女は見
上げ、隷属し、依存し、すがりつき、結婚式がうわべを飾ろうとも、実際に目下
のものとなり始めていた。本能的に、彼女は彼女の信じる結婚した妻というもの
になろうとしていたのだ。

¹⁴⁾ 男性の享楽、性的な享楽はこのファルスの享楽とされる。

¹⁵⁾ Lacan, Jacques. *Le Séminaire, Livre XX. Encore* (1972-1973), texte établi par Jacques-Alain Miller, Éditions du Seuil, 1975, p. 13. (なお、セミナー読解の際には全訳されたものを参照した。ラカン『アンコール』, 藤田博史・片山文保訳, 講談社, 2019.)

こうして彼女は、サミュエルにとって超越的な存在ではなくなっていく。それどころか、サミュエルはビアトリスのこの様子に「犬のような」といった形容詞をつけるようになる。

As though from conception she had waited for this, now she bowed against me. She watched me with doggie eyes, she put the lead in my hand.

“What shall we talk about?” (p. 121)

まるで受胎したときからこのことを待っていたかのように、彼女は僕に屈服した。彼女は僕を犬のような眼で見つめ、リードを僕の手握らせた。

「何をお話ししましょうか？」

「母」として、超越的な<他者>としてのビアトリスは、単なる他者になっただけでなく、サミュエルと対等な存在ですらなくなったのだ。こうしてビアトリスは、サミュエルの「母」から転落する。

I no longer desired to understand her, no longer believed that she had some secret. (p. 127)

僕はもはや彼女を理解することを望んだり、彼女が何か秘密の力を持っていると信じなくなった。

この結果、サミュエルはビアトリスから逃亡する。そして、別のタフィ (“Taffy”) という女性と恋をし、彼女と結婚することを選択するのだ。

3-4. 「母」を引き継がない者

ただし、タフィは「母」を引き継がない。彼女はビアトリスのように<他者>にはならず、一人の人間として扱われる。これはビアトリスとは違い、タフィの顔の描写がしっかりされていることから理解することができる。

She was dark and vivid. She had the kind of face that always looks made-up, even in the bath—such black eyebrows, such a big, red mouth. She was the prettiest girl I ever saw, neat in profile, with soft cheeks and two dimples that were in stunning contrast with her tenor voice and scarifying language. (p. 126)

彼女は黒髪で、生き生きとしていた。彼女は、たとえ風呂の中でも、いつでも化粧をしているような顔を—そのような黒い眉毛、大きくて、赤い唇をしていた。僕が今まで見た中で最も美しい女性で、横顔が端正で、柔らかい頬と二つのえくぼが、彼女のテノールの声とけなし言葉と、驚くほど対照的であった。

これは、サミュエルが特定の女性に対して「母」の像を見て取ることを諦めたことを意味する。彼はようやく、「母」と一体化したいという願望から抜け出すことができたと考えることができるだろう。一方で、哀れなピアトリスは、もう回復の見込みがないとまで言われるほどに精神を病む。後に改心したサミュエルは、許しを請うために彼女のもとを訪れるのだが、そこではピアトリスがまだ「母」であったとき、あれほど避けられていたピアトリスの顔の描写がされるのである。

Her face was in the shadow of her body; but a little light was reflected from the institutional wall and showed some of the moulding. Certainly the bones of the face were well hidden now. The flesh had hidden them in lumps—or was it the very bone that had coarsened? (p. 242)

彼女の顔は体の影に隠れていた。しかし施設の壁からわずかに光が反射し、顔立ちの一部を見せた。確かに、今や顔の骨がよく隠れている。肉が塊になってそれらを隠したのか—それとも、骨自体が廃れてしまったのだろうか？

このとき、かつてあった額のまわりの光も消え失せている (p. 242)。目に関しても、埋没した目 (“the entombed eyes”) (p. 243) として描写され、ピアトリスの現在の外見がありありと語られるのであった。

4. 結 論

本稿では、なぜピアトリスは捨てられたのか？という問いに関し、まず第二節でエディプス・コンプレックスの概念を援用しながら、サミュエルの幼児期の環境に注目した。そこでは、サミュエルがピアトリスに執着していたときの、その想いの起源としてエヴィと彼の実母が登場しており、彼女たちはエディプス的な「母」としての役割を担っていたのだった。しかし本来想像的な世界だけでなく、象徴的な規則の世界にも参入しなければいけない幼児期に、父親の役割をするものが猥雑な町であるロトン・ロウにはなかったため、サミュエルの母親と一体化したいという欲望が完全に消されないままになったのであった。

続く第三節で、「母」がピアトリスに引き継がれていることを再度確認し、また、ピアトリスがサミュエルにとって絶対的他者として、顔が認識できないほどにサミュエルを超越していたことを示した。サミュエルの「母」と一体化したいという欲望、言い換えると、彼女と融合して享楽に到達したいという望みは死を除いて、現実には不可能なものであった。一体化の試みとしてサミュエルは性交渉を行うが、これはファルス的な享楽を得るだけであり、むしろ享楽から遠ざけてしまうものなのであった。一体化する術がないことを知ったサミュエルは絶望し、さらにはサミュエルの妻として屈服し、犬のようになるピアトリスを受け入れられなくなる。サミュエルにとってもうピアトリスは、「母」という座から転落した者になるのであった。こうして、サミュエルはピアトリスから逃げる、つまりは、ピアトリスを捨てるという選択をしたのだ。それからタフィという女性と結婚するが、彼女は「母」を引き継がない。*Free Fall* は、サミュエルがやっと「母」と決別するまでの過程を描いた物語であるといえるだろう。

執筆者紹介

青木克仁 (認知意味論) 安田女子大学教授

青 木 順 子 (異文化コミュニケーション)
安田女子大学教授

杉 山 正 二 (英語学) 岡山理科大学教授

井 上 彩 (イギリス文学) 広島経済大学講師

学会活動報告

1 2023 年度講演会

11 月 16 日 (木), 7102 教室において講演会が行われた。講師は平和のためのヒロシマ通訳者グループ (HIP) 代表 小倉桂子。演題は「ヒロシマの「リアリティ」を世界に伝えて 40 年 (40 years—Sharing Hiroshima's Reality with the World)」

2 2023 年度研究発表会

12 月 12 日 (火)

1 日英語比較研究

——言語構造と社会言語学的側面——

安田女子大学大学院 博士前期課程 原 早也佳
(司会 青木 順子)

2 Cell Phone Addiction among Young People:

The Disease That Nobody Talks About.

安田女子大学 准教授

Pete D'Angelo
(司会 青木 順子)

投 稿 規 定

- 1 会員による英語学、英米文学、英語教育学、異文化理解などに関する未発表の論文であること。
- 2 本論集は安田女子大学 文学部 英語英米文学科のホームページ上で公開し、著者には印刷物を 2 部寄贈する。
- 3 投稿書式設定と提出ファイル形式は以下の通りとする。
 - ・Microsoft Word 互換のソフトウェア(docx ファイルのみ)として保存し、PDF ファイルと共に編集長宛てに email で投稿する。
 - ・用紙サイズは A5 とし、余白は上左右各 15 ミリ、下 10 ミリ、文字数と行数を、文字数 35 文字、行数を 29 行に設定する。
 - ・本文を日本語で書く場合のフォントは MS 明朝 (10 ポイント)、英語で書く場合は Times New Roman (10.5 ポイント) の文字サイズを用いることとし、シングルスペースの行間とする。
 - ・題目 (12 ポイント・ボールド) は、2 行目から書き出し、センタリングする。サブタイトル (12 ポイント) は、題目の 1 行下に入れ、センタリングする。
 - ・著者名 (12 ポイント・ボールド) は、題目の後に 1 行スペースを空けて記入し、センタリングする。
 - ・Abstract (10 ポイント) は、著者名の後に 1 行スペースを空けて書き始める。
 - ・Abstract は、日本語であれば 400 字以内、英語であれば 200 語以内とする。なお、abstract のタイトル部分のみ太字 (ボールド) とする。
 - ・本文は、abstract の後に 1 行スペースを空け、セクションの題目 (10.5 ポイント・ボールド・センタリング) を挿入した後から書き始める。なお、セクションの数字は 1 から始めることとする。1.1.のようなセクションの下位項目の題目 (日本語 10 ポイント・ボールド、英語 10.5 ポイント・ボールド) は、左詰めにする。
 - ・論文の長さは、注、図表、参考文献などを含めて 10 から 20 頁とする。
 - ・引用、参考文献などの書式は、それぞれの分野に応じたものを用いる。
 - ・注 (9 ポイント) は脚注とする。
 - ・投稿時には完成した原稿を提出し、校正は確認用の PDF ファイルを一度送ることで最終とする。

附 則

この改正規定は、平成 5 年 6 月 17 日から施行する。
この改正規定は、平成 9 年 6 月 19 日から施行する。
この改正規定は、平成 14 年 6 月 20 日から施行する。
この改正規定は、平成 22 年 5 月 13 日から施行する。
この改正規定は、平成 25 年 6 月 17 日から施行する。
この改正規定は、平成 30 年 7 月 12 日から施行する。

安田女子大学英語英米文学会会則

第1条 本会は安田女子大学英語英米文学会と称する。

第2条 本会は英語学・英米文学・英語教育学を中心とする学術的研究とその啓発を目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 研究会・研究発表会・講演会等の開催
- 2 機関誌の発行
- 3 その他必要と認められる事業

第4条 本会は次の会員および準会員で組織する。

会員

- 1 本学英語英米文学科専任教員
- 2 本学大学院英語学英米文学専攻の在学生
- 3 その他、本会の主旨に賛同し、入会を希望して評議員会の承認を受けた者
- 4 会員は本会主催の行事に参加すると共に、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことができる。

準会員

- 1 本学文学部英語英米文学科の在学生
- 2 準会員は本会主催の行事に参加することはできるが、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことはできない。

第5条 本会に名誉会員を置くことができる。名誉会員は本会の発展に貢献が認められた本学退職教員の中から役員会の推薦を受け、評議員会の承認をもって決定される。

第6条 本会に次の役員を置き、役員会を組織し、事業の運営にあたる。

- 1 会 長
本学文学部英語英米文学科長を充てる。
- 2 運営委員
教 員 若干名、互選により選出する。
- 3 会計監査
(ア) 教 員 2名、互選により選出する。
(イ) 大学院生 1名、互選により選出する。

第7条 本会に次の評議委員会を置き、評議員会を組織し、事業計画の審議、会則の改正、監査報告の承認等を行う。評議員会は会長が召集する。評議員会は年1回以上開催する。

- 1 本学英語英米文学科専任教員
- 2 大学院生1名、互選により選出する。

第8条 評議員会は、構成員の過半数の出席をもって成立する。委任状はこれを認める。会則の改正には3分の2以上の賛成を要する。

第9条 役員は年度初めに選出し、評議員会において審議のうえ、承認する。役員の任期は1年とし、再任を妨げない。

第10条 本会の会員の会費は年額3,000円とし、毎年度初めに納入する。ただし、大学院生会員の会費は年額1,500円とする。2年以上連続して会費未納の者は、自動的に会員の資格を失うものとする。また、準会員の会費は無料とする。

第11条 本会は事務局を本学文学部英語英米文学科事務室内に置く。

第12条 本会の会則の施行に関する必要な事項は別に定める。

第13条 本会は平成3年4月1日に発足する。

施行細則

- 1 運営委員（教員）は幹事、書記、編集とする。
- 2 教員の委員は5名とする。
 - (ア) 幹事2名、書記1名、編集2名とする。ただし、幹事のうち1名は運営委員長を務める。
 - (イ) 会計は本会事務局（英語英米文学科事務室）の担当とする。
- 3 会費の納入は、以下のいずれかによるものとする。
 - (ア) 会計へ直接納入
 - (イ) 現金書留での郵送
 - (ウ) 学会口座への振込

附 則

この改正規定は、平成 6 年 5 月 1 9 日から施行する。

この改正規定は、平成 8 年 6 月 1 3 日から施行する。

この改正規定は、平成 1 3 年 7 月 5 日から施行する。

この改正規定は、平成 1 5 年 5 月 1 5 日から施行する。

この改正規定は、平成 2 2 年 5 月 1 3 日から施行する。

この改正規定は、平成 3 0 年 4 月 1 日から施行する。

編集委員 三宅 英文
島 克也

英語英米文学論集 第三十三号
2024 年 2 月 9 日発行

発行者 安田女子大学英語英米文学会
代表者 松岡 博 信
広島市安佐南区安東 6-13-1

印刷所 株式会社 山菊